

大分県
埋蔵文化財年報 3

平成5 (1993) 年度版



大分県教育委員会

表紙：日田市穴観音古墳前室右壁（撮影 石丸洋氏）

序 文

大分県教育委員会では平成3年度より毎年、その年度内に県内で行われたすべての発掘調査の概要等を掲載した年報を発行しております。平成5年度も、後掲のように202件の発掘調査が行われましたが、これらはすべて埋蔵文化財の保護・保存に資することを目的に県市町村の文化財担当課、あるいは資料館が中心となって行ったものです。

しかし多くの遺跡は調査後、土木工事などに伴い、再び深い眠りにつくことになります。これは、開発側と保護側との真摯な話し合いの結果、記録保存という結論に至ったものであり、その過程では、重要部分の盛土保存、掘削面積の縮小、あるいは重要遺構の地区除外といった、この年報には表れない様々な遺跡保護・保存のための努力もいたしております。また、調査後重要性の明らかになったものについては史跡に指定するなどの措置をとり、将来にわたって保護し、さらに歴史資料として活用していく方途を推進し、21世紀へ向けた積極的な文化財の活用を展開しているところであります。今後とも、埋蔵文化財の保護・保存への御理解・御協力をお願いいたしますとともに、本書がそのための一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行に際し御協力をいただいた各市町村教育委員会をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月31日

大分県教育委員会
教育長 帯刀 将人

例 言

1. 本書は平成5年(1993)度に大分県内で行われたすべての発掘調査の基礎データと、大分県の埋蔵文化財に係わる様々な資料を掲載している。
2. 発掘調査は、試掘調査により遺跡が確認されなかったものも掲載しており、その場合には〇〇地区という扱いにしている。
3. 第Ⅲ章調査概要の中の台帳番号は『大分県遺跡地図』(大分県教育委員会、1993年)所収の遺跡一覧表の台帳番号と等しく、新発見遺跡の場合はその旨を記す。
4. 本書の執筆はⅠの1と2を原田昭一、同3を坂本嘉弘、同4を後藤一重、Ⅱを原田、Ⅲは各遺跡の調査担当者が分担執筆した。Ⅵの纏めは田中裕介による。Ⅶは文末に執筆者を記した。
5. 本書の編集は後藤一重、小柳和宏、田中裕介、吉田寛が行った。

目 次

序 文	
例 言	
Ⅰ 埋蔵文化財保護行政	1
1. 現状	1
2. 発掘調査体制の整備	1
3. 九州地区埋蔵文化財発掘調査基準作成へ向けて	1
4. 作業員の健康管理について	2
Ⅱ 1993年度埋蔵文化財発掘届出による動向	4
Ⅲ 各遺跡の調査概要	9
1. 中津・字佐地域	10
2. 別府・東国東地域	54
3. 大分・北海部地域	78
4. 佐伯・南海部地域	115
5. 竹田・大野地域	119
6. 日田・玖珠地域	142
Ⅳ 現地説明会・展示会・講演会・シンポジウム等一覧	175
Ⅴ 1993年度の史跡指定埋蔵文化財一覧	178
Ⅵ 1993年度の刊行埋蔵文化財関係文献一覧	179
Ⅶ 1993年度の時代別動向	185
Ⅷ 埋蔵文化財の調査に関する諸手続き	190
Ⅸ 掲載遺跡一覧	193
索 引	

column①	新指定史跡の紹介① 県史跡秋葉鬼塚古墳	26
column②	復元整備された川部遺跡	43
column③	整備された森の木遺跡	44
column④	豊のあけぼの展（香々地会場）	46
column⑤	日韓シンポジウム	60
column⑥	孫九郎の茶碗	70
column⑦	豊のあけぼの展（直入会場）	74
column⑧	水没した調査区	80
column⑨	復位された仏頭	111
column⑩	新指定史跡の紹介② 豊後高田市史跡割掛遺跡	116
column⑪	史跡岡城跡本丸南側石垣崩壊	136
column⑫	装飾古墳の調査始まる	153

I 埋蔵文化財保護行政

1. 現 状

1992年度における『大分県遺跡地図』の作成により、県下を網羅した遺跡台帳の完成をみたが、今後の文化財保護行政においては一時の通過点にはかならず、今後新たな遺跡の確認、より詳細な遺跡範囲の設定は必要不可欠のものであることは言うまでもない。

今後、さらに充実した文化財保護行政を目指すうえで、遺跡自身の認識において、議論の余地が多々みられる現状にある。例えば条里地割水田・近世城下町遺跡・近世墓など現代も引き続き人間の足跡が辿れる遺跡に対し、どのような認識をもち文化財保護に取り組むのか、ほんの一例に過ぎないが、周知遺跡の多様化が考えられ、遺跡自体に対する共通理解が必要とされる時期にあると言えよう。また、このような日々の遺跡の多様化および依然、激化の方向を辿る開発行為に対し、的確な文化財保護行政を果たしうるだけの体制強化が急務とされる現状にある。

2. 発掘調査体制の整備

周知遺跡の増加および多様化に伴い、埋蔵文化財発掘調査の届け出件数は、平成にはいり毎年100件を超える状況にあり、その数も漸次増加する傾向にある。この発掘調査の増加とはうらはらに各自自治体における調査員の絶対数に関しては、少しずつ増加してはいるものの、まだ十分とはいえない。そのため、最も注意を払われるべき事故の発生が危惧される状況にある。それゆえ県下各地での発掘調査に携わる作業員について健康診断書の提出を求め、各人の健康状態の把握に努める体制を確立した。これとともに発掘調査自体が土木作業を伴うものであり、発掘調査現場での安全基準の検討が試みられる現状にあると言えよう。

県下の埋蔵文化財行政を担うべき専門職員はわずかではあるが市町村において採用され、体制確立を図りつつあるが、まだまだ十分とは言えず、例えば1カ所の発掘現場に複数の調査員がたずさわる体制にまで強化する必要がある。それゆえ、専門職員不在が指摘できる県南部をはじめとして市町村での体制確立および県自体のさらなる体制強化が課題とされる現状にある（4ページ表1参照）。

3. 九州地区埋蔵文化財発掘調査基準作成へ向けて

(1) 埋蔵文化財保護対策等九州地区協議会設立までの経緯

年々増加する開発事業とそれに伴う埋蔵文化財発掘調査の円滑化をはかるため、昭和60年12月20日付け庁保記第102号「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化について」の通知が文化庁次長からあった。この内容のひとつに、「…発掘調査の経費については、都道府県単位を超えて各地方ブロックごとに標準的な積算基礎を定めて算出するよう努めることとし…」とあり、

県単位を超えた発掘調査の基準作りが求められた。

この通知に対し、九州地区では平成4年6月の九州各県・政令都市文化文化財行政主管課長会議（以下主管課長会議）で宮崎県から提言があり、九州各県・政令都市文化文化財行政担当者会議（以下担当者会議）で検討する事となった。9月に熊本県で開催された担当者会議で検討したが、問題が大きく検討に時間がかかるなどの理由から11月に鹿児島県で開催された主管課長会議に、担当者会議だけでは検討できないので新たに専門の協議機関の設置を担当者会議開催県である熊本県から提言した。

その提言にしたがって、主管課長会議では、当面専門の協議機関の設置のための準備会を熊本県で開催することとなった。

準備会は、平成5年3月に開催され、検討方針等を協議し名称を「埋蔵文化財保護対策等九州地区協議会」とすることなどが決定され、平成5年度の第1回主管課長会議の承認を受けたあと正式の協議会を発足させることとなった。

(2) 平成5年度の検討経過

主管課長会議の承認を受けたあとの7月に大分県日田市で開催した。第1回の協議会には岡村道雄主任文化財調査官の参加をいただき、ブロック化の意義や先行する関東・甲信越ブロックや北陸ブロックの状況説明があった。また会議の運営の方法についても討議され、幹事県として福岡県・佐賀県・熊本県・大分県・長崎県が選出され、事務局県の熊本県で幹事会を隔月開催し、9・11・1・3月に開催される全体会議の議案を事前に作成することを決めた。そして、平成5年度は発掘調査基準、平成6年度は発掘調査の積算基準を作成することを目標とした。さらに、調査基準については個人住宅、道路・鉄道・河川・ダム、農業関係開発、民間・公共など各種開発事業の順で検討することも決められた。

第2回の協議会は佐賀県で文化担当者会議として9月に開催された。主として、個人住宅の取扱、道路・鉄道・河川・ダム等について検討された。個人住宅は恒久的建造物とみなされ、調査の対象とすることになった。その後、第3回は11月に長崎県で農業基盤整備事業について、第4回は1月に福岡県で民間・公共の各種開発事業について検討され、それぞれ成文をおこなった。そして第5回は3月に熊本県で開催され、これまで討議し成文化してきた文案をまとめ、さらに協議を行なった。その結果、九州地区埋蔵文化財発掘調査基準は、次のような構成にした。前文-第1条目的-第2条適応対象-第3条基準の遵守-第4条発掘調査基準の基本方針-第5条発掘調査の方法・内容等-第6条発掘調査の経費・期間等の積算-第7条基準の改正。この文案は次年度の5月に担当県である宮崎県で再度討議し、6月に予定されている九州地区主管課長会議で中間報告することになった。

4. 作業員の健康管理について

近年では、各種開発事業の増大により、それに伴う緊急発掘調査の件数も急増している。加

えて、調査の規模自体も以前とは比較にならないほど大規模化し、多数の作業員が日常的に現場作業にあたり、なかには数年にも及ぶような長期の現場もみられる。また、調査報告書刊行に向けての遺物整理作業も、膨大な出土遺物を前に多くの整理作業員を動員しての作業となっている。すなわち現状における緊急発掘調査では、現場における発掘作業から整理作業にいたるまで、長期にわたり多くの作業員の手を煩わさなければ、事業の推進が困難になっているのが現状である。このような状況にあって、一方では作業員の不足や高齢化という深刻な問題も生じている。これまでも、酷暑から寒中にいたる現場作業および時として重量物運搬を伴う整理作業における作業員の健康面については十分に注意するところであった。しかし、作業員不足および高齢化という近年の状況を考えれば、作業員の健康管理について今以上の気配りが必要なのは言うまでもない。

このため県文化課では、県が事業主体となる発掘調査、整理作業に従事するすべての作業員について、労働安全規則第43条により雇用時に健康診断書の提出を求めることとした。これは(1)雇用を希望する作業員が作業に適する健康状態であるかを判断する、(2)雇用した後作業員の健康と体力に合っ

た作業が行えるようにその参考にする、以上の目的のため行われるものである。健康診断書は1年間のみ有効で、雇用が1年を超えるものについては再び健康診断書の提出を求める。

いづれにしても、作業員が安全かつ健康的に作業できる環境は、作業を指揮する調査員の意識と努力で整えられるものである。作業内容や気象条件、作業員の年齢、性別、健康状態などを臨機応変に判断し、万全な現場運営をしていかねばならない。

診 断 書	
氏 名	男 性
生年月日	昭和 年 月 日 (生 年 月 日)
職業	平成 年 月 日
身 長	cm
体 重	kg
胸 囲	cm
視 力	右 () 左 ()
色 視	正常・異常 ()
脈 率	脈・有 ()
血 圧	脈部 平成 年 月 日
聴 力	右 () 左 ()
耳 疾	聴・有 ()
血 庄	mmHg
機 能	聴覚エックス線写真見
血 庄	1時間前 1時間後 2時間後 3時間後
貧 血	血色素値 赤血球数
肝 機能	G O T G P T γ-G P T
血中尿酸	mg/dl
心 電 図	
上記のとおり診断します。所在地 平成 年 月 日 機関名 氏 名 印	

診断書の様式

II 1993年度埋蔵文化財発掘届出による動向

県下の発掘調査件数の推移は第1図に示すとおりである。昨年度の142件に比較すれば今年度は134件とやや減少する傾向にある。この背景には昨年度以来のバブル崩壊による景気の低迷があるものと思われるが、今年度の発掘調査件数も平成元年度以来の発掘調査件数の激増の波の中にあるものであり、昭和時代の発掘調査件数に比較すれば膨大な数値であることは否定できない。

また、発掘調査の動向をみてみると表2に示したように、昨年度以来の景気の低迷に反映された動向が読み取れる。依然として建設省・道路公団をはじめとした道路建設事業の多さには目をひくものがあるが、昨年度に比較すればやや減少していることがわかる。また、観光開発・電気工事・工場関連など大規模な民間開発も影を潜める傾向が継続して見受けられる。

これに対して公園関連・遺跡整備などはわずかであるが増加していることがわかる。いわゆる“町おこし・村おこし”の一環として公園および遺跡整備を図る自治体が多々みうけられ、この傾向は漸次増加するものであると思われる。

以上の発掘調査の動向とは異なるが、近世城下町遺跡の周知遺跡化などからも、都市部をはじめとした住宅地関連の発掘調査件数が激増することは疑う余地がなく、今後の発掘調査費用の負担者の問題や発掘担当者をはじめとした調査体制の整備、発掘調査期間の確保など検討すべき様々な課題が抱えられていることを念頭に置かなければならない現状にある。第2図は今年度の市町村別発掘調査届出件数であるが、昨年度に引き続き県南部の届出件数が他地域に比較して少ないことがわかる。しかし九州横断道・中津バイパス・宇佐道路・宇佐別府道路などの完成に伴い、今後は県南部に高速道路網が延びるため道路建設事業をはじめとして、道路網の整備による諸開発の波が押し寄せることは疑いなく、県南部各市町村における体制整備が望まれる現状にある。

表1. 埋蔵文化財担当職員数

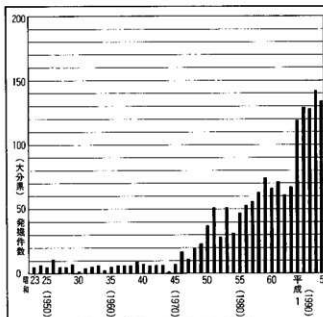
機関名	人数
県文化課	31
土佐市の歴史	3
宇佐市の歴史	6
大分市の歴史	4
大分市歴史資料館	2
中国歴史資料館	3
中津市の歴史	2
豊後高田市の歴史	2
日田市の歴史	2
竹田市の歴史	2
三ツ矢町の歴史	1
安心院町の歴史	1
安芸町の歴史	1
外郎町の歴史	1
秋田町の歴史	1
日田市の歴史	1
別府市の歴史	1
大津町の歴史	1
三ツ矢町の歴史	1
計	60

(1994年3月現在)

表2. 平成5年度 大分県発掘調査の動向

事業名	件数	%	件数	%
道路建設	31	23.8	36	25.3
河川改修	4	3.0	4	2.8
学校関連	5	3.8	9	6.3
住宅宅地	18	13.8	19	13.3
土地区画	3	2.3	4	2.8
観光開発	1	0.7	2	1.4
電気工事	1	0.7	2	1.4
工場関連	1	0.7	4	2.8
農業関連	26	20	29	20.4
土砂採取	3	2.3	4	2.8
自然破壊	0	0	0	0
遺跡整備	6	4.6	5	3.5
ゴルフ場	0	0	0	0
公園関連	8	6.1	3	2.1
学術研究	1	0.7	0	0
急傾斜対策	1	0.7	5	3.5
その他	21	16.1	16	11.2

(平成5年度) (平成4年度)



第1図 (県内発掘調査件数の推移)



第2図 平成5年度市町村別発掘調査届出件数

平成5年度 大分県埋蔵文化財発掘届・発見届一覧

(届出順)

番号	遺跡名	所在地	届出者	事業内容	時代	根拠条
1	敷田城跡	宇佐市大字中敷田	宇佐市長	道路	中世	57条の3
2	虚空蔵寺跡	宇佐市大字山本	和田昇	塙の築造	奈良	57条の3
3	府内城下跡	大分市府内町3丁目	大分合同新聞社	社屋建築	弥生・近世	57条の2
4	下部遺跡群	大分市大字下郡	大分市長	区画整理	縄文～近世	57条の3
5	狭田地区武家屋敷群	竹田市大字狭田	山越勝美	住宅	中世・近世	57条の2
6	杉園遺跡	天瀬町大字五馬市	農地開発公社	農業関連	弥生・古墳	57条の3
7	徳瀬遺跡	日田市大字塩手	日田市長	道路	弥生・古墳	57条の3
8	沖代条里遺構	中津市中央町2	カリキタ工務店	宅地造成	奈良	57条の2
9	亀山古墳	中津市大字下池永	水取孝	構造物建築	古墳散布地	57条の2
10	植田条里跡	大分市大字玉沢	大分県知事	精神保険セ	奈良	57条の3
11	平等寺遺跡	国東町大字原	大分県知事	墓場整備事業	中世	57条の6
12	賀来中学校遺跡	大分市大字賀来	大分市教育長	学校建設	弥生	57条の3
13	猪野遺跡	大分市大字猪野	㈱山和興産	宅地造成	弥生	57条の2
14	東貝塚	杵築市大字片野	地方観光局長	農業関連	縄文	57条の3
15	犬丸川流域遺跡	中津市大字伊藤田	大分県知事	河川	弥生・古墳・中世	57条の3
16	上万田遺跡	中津市大字万田	中津土木事務所	道路	弥生・古墳	57条の3
17	久末京徳遺跡	安岐町大字朝来	安岐町教育長	学校建築	奈良・平安	57条の3
18	求来里平島遺跡	日田市大字求来里	大分県知事	道路	古墳	57条の3
19	三口遺跡	中津市大字相原	中津市教育長	道路	弥生・古墳	98条の2
20	大石遺跡	緒方町大字大石	緒方町教育長	道路	縄文	98条の2

番号	遺跡名	所在地	届出者	事業内容	時代	根拠条
21	釘野遺跡	九項町大字後野上	九項町教育長	公園造成	縄文・中世	57条の3
22	小川原遺跡	人田村大字上寄掛	大田村教育長	農業関連	弥生	98条の2
23	安国寺遺跡	国東町大字原	国東町教育長	園芸整備事業	弥生	98条の2
24	上野第1遺跡	日田市大字上野	大分県教育長	道路	奈良・近世	98条の2
25	石仏群地域遺跡	臼杵市大字深田	臼杵市教育長	宅地造成	中世・近世	98条の2
26	大友館跡	大分市上野丘西	大分市教育長	その他開発	中世	98条の2
27	多武尾遺跡他	人分市大字横尾	人分市長	区画整理	弥生～中世	57条の3
28	府内城跡	大分市大手町3	大分県知事	記念碑建設	近世	57条の3
29	二本木遺跡	大野町大字大原	大野町教育長	農業関連	弥生	98条の2
30	子招遺跡	日出町大字川崎	日出町長	工場建設	旧石器	57条の3
31	春木万元遺跡	別府市大字北石垣	御本多産建	宅地造成	弥生・古墳	57条の2
32	如水井	中津市大字大塚	中津土木事務所	道路	近世	57条の3
33	大池南遺跡	中津市大字永添	中津市医師会	学校建設	弥生・古墳	57条の2
34	横道遺跡	荻町大字恵良原	荻町教育長	福祉施設エリア	弥生	57条の6
35	高瀬遺跡	日田市大字高瀬	日田土木事務所	道路	弥生・古墳	57条の3
36	岡藩城下町遺跡	竹田市大字竹田	竹田市長	道路	近世	57条の3
37	鬼ヶ城跡	竹田市大字竹田	竹田市長	公園造成	中世・近世	57条の3
38	植田地区遺跡群	大分市大字玉沢	大分県教育長	道路	弥生・古墳	98条の2
39	成恒城・朝山他	三光村大字成恒	三光村長	公園造成	古墳・中世	57条の3
40	向山古墳	宇佐市大字下元重	宇佐市教育長	土砂採取	古墳	98条の2
41	古国府遺跡群	大分市大字古国府	大分市長	道路	弥生・古墳・奈良	57条の3
42	亀塚古墳	大分市大字里	大分市教育長	遺跡整備	古墳	98条の2
43	沖代条里遺構	中津市中央町2	備カネカ開発	宅地造成	奈良	57条の2
44	日出城下町遺跡	日出町2974の1	日出町長	庁舎増築	近世	57条の3
45	永添遺跡	中津市大字相原	中津市長	公園造成	古墳	57条の3
46	虚空蔵寺跡	宇佐市大字山本	宇佐市教育長	住宅建設	古墳・奈良	98条の2
47	津守遺跡	大分市大字津守	医療法人青樹会	宅地造成	弥生・古墳	57条の2
48	宇対瀬遺跡	二重町大字宇対瀬	二重土木事務所	河川	縄文・古墳	57条の3
49	川部遺跡	宇佐市大字川部	宇佐市長	道路	弥生・古墳	57条の3
50	上居原敷遺跡	宇佐市大字別府	大分県知事	道路	弥生～中世	57条の3
51	古国府遺跡	大分市大字羽屋	医療法人信興会	病院新築	弥生・奈良・中世	57条の2
52	鍋田原遺跡他	野津町大字鍋田	建設省	道路	旧石器・縄文	57条の3
53	府内城下町遺跡	大分市府内町2	人分市長	公園造成	近世	57条の3
54	高森城跡	宇佐市大字高森	宇佐市教育長	土砂採取	旧・弥・古・中	98条の2
55	安国寺遺跡	国東町大字安国寺	大分県知事	土地区画整理	弥生～中世	57条の3
56	外園遺跡	国東町大字北江	大分県知事	園芸整備事業	中世	57条の6
57	岩屋寺跡	大分市大字上野東	備三栄都市	災害防止工事	弥生・平安	57条の2
58	光吉遺跡	大分市大字光吉	大分市教育長	道路	奈良	98条の2

番号	遺跡名	所在地	届出者	事業内容	時代	根拠条
59	宮崎遺跡	大分市大字光吉	大分市教育長	道路	奈良	98条の2
60	牟礼越遺跡	三重町大字百枝	別大博物館長	学術調査	旧石器	57条の1
61	下野遺跡	犬飼町大字下津尾	犬飼町教育長	道路	旧・縄文・中世	98条の2
62	森山遺跡	三光村大字森山	福岡田洋ラン	公園造成	弥生	57条の2
63	敷戸城津留遺跡	大分市大字鷺野	宮崎正朗	宅地造成	中世	57条の5
64	田中遺跡	香々地町大字香々地	香々地町教育長	園場整備事業	中世	98条の2
65	坂口遺跡	香々地町大字香々地	香々地町教育長	園場整備事業	縄文	98条の2
66	信重遺跡	香々地町大字香々地	香々地町教育長	園場整備事業	平安・中世	98条の2
67	田中遺跡外	香々地町大字香々地	西高地方振興局	園場整備事業	縄文・平安・中世	57条の6
68	宮迫坊中跡	宇佐市大字南宇佐	宇佐市教育長	道路	中世・近世	98条の2
69	横手遺跡	国東町大字横手	大分県知事	園場整備事業	平安	57条の6
70	由布川・下黒野	挾間町大字古野	大分県知事	道路	弥生	57条の3
71	大坪遺跡第2	中津市大字加来	中津市教育長	電気工事	弥生・古墳	98条の2
72	大魔遺跡	安岐町大字掛樋	大分県知事	園場整備事業	中世	57条の6
73	〃	安岐町大字掛樋	安岐町教育長	園場整備事業	中世	98条の2
74	江洲遺跡	耶馬溪町大字宮園	相良清隆	畑作	古墳	57条の5
75	雄城台遺跡	大分市大字玉沢	大分県知事	校舎建設	弥生	57条の3
76	赤迫遺跡	中津市大字赤迫	中津市長	農業関連	古墳	57条の3
77	〃	中津市大字赤迫	中津市教育長	農業関連	古墳	98条の2
78	大塚古墳	真玉町大字西点玉	真玉町教育長	拝殿改築	古墳	57条の3
79	〃	真玉町大字内真玉	真玉町教育長	拝殿改築	古墳	98条の2
80	柳原遺跡	庄内町大字大籠	庄内町教育長	観光開発	縄文・弥生	98条の2
81	佐寺原遺跡	日田市大字有田	大分県知事	草生実験地	弥生	57条の3
82	臼杵城二の丸跡	臼杵市大字臼杵	臼杵市教育長	宅地造成	近世	98条の2
83	外園遺跡	国東町大字北江	国東町教育長	園場整備事業	中世	98条の2
84	武家屋敷	竹田市大字竹田	竹田土木事務所	道路	中世	57条の3
85	北江・秋国遺跡	国東町大字北江	大分県知事	園場整備事業	中世	57条の6
86	山蔵西地区	安心院町大字山蔵	宇佐市病院事務局	園場整備事業	中世	57条の3
87	大勝院跡	竹田市大字竹田	願成院	遺跡整備	近世	57条の2
88	大辻山中世墓	三重町大字井迫	三重町教育長	遺跡整備	中世	98条の2
89	沖代条里遺構	中津市大字永添	仙東邦不動産	宅地造成	奈良	57条の2
90	手崎遺跡F地区	日田市大字高瀬	大分県教育長	道路	縄文・古墳・奈良	98条の2
91	角牟礼山城跡	玖珠町大字森	玖珠町教育長	遺跡整備	中世・近世	98条の2
92	秋国遺跡	国東町大字北江	国東町教育長	園場整備事業	中世	98条の2
93	井村遺跡	臼杵市大字井村	臼杵市教育長	道路	弥生～古墳	98条の2
94	塚原	湯布院町大字塚原	湯布院町教育長	グラウンド	近世	98条の2
95	上万田遺跡	中津市大字万田	大分県教育長	道路	弥生	98条の2
96	塚原鶴見嶽遺跡	湯布院町大字塚原	鶴リック	グラウンド造成	近世	57条の5

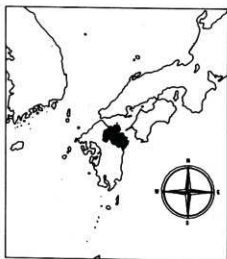
番号	遺跡名	所在地	届出者	事業内容	時代	根拠表
97	横迫遺跡群	荻町大字恵良原	竹田土木事務所	道路	縄文	57条の3
98	裝飾古墳	日田市・玖珠町	大分県教育長	遺跡整備	古墳	98条の2
99	田薬台遺跡	臼杵市大字江無田	仰旭プラザ	住宅建設	縄文～中世	57条の2
100	虚空蔵寺遺跡	宇佐市大字山本	宇佐市教育長	道路	古墳・奈良・近世	98条の2
101	下金遺跡	挾間町大字三船	佛ニノミヤ物産	倉庫	旧石器	57条の5
102	馬場遺跡	竹田市大字挾田	竹田土木事務所	河川	近世	57条の3
103	副城山城跡	院内町大字副	院内町長	遺跡整備	中世	57条の3
104	臼杵城下町遺跡	臼杵市大字二王座	臼杵市教育長	無線塔建設	近世	98条の2
105	神領貝塚	杵築市大字片野	大分県知事	調査発掘事業	縄文	57条の6
106	岩屋寺遺跡	大分市上野東	鶴三栄都市	宅地造成	中世	57条の2
107	古国府遺跡群	大分市大字羽生	大分市水道業	水道	中世	57条の3
108	山下の池遺跡	湯布院町大字川西	佛九州電力	ヘドロ採取	縄文	57条の2
109	戸上遺跡	竹田市大字戸上	竹田市教育長	道路	弥生・近世	98条の2
110	三重原遺跡群	三重町大字小坂	佛久光開発	宅地造成	縄文	57条の2
111	小部遺跡	宇佐市大字荒木	宇佐市教育長	住宅	古墳・奈良・平安	98条の2
112	瓦塚遺跡	宇佐市大字石田	佛大洋測量設計	事務所建設	奈良・平安	57条の2
113	原第1遺跡	国東町大字原	国東町教育長	園場整備	弥生・古墳・中世	98条の2
114	宇辻瀬遺跡	三重町大字浅瀬	大分県教育長	河川	弥生	98条の2
115	小迫辻原遺跡	日田市大字小迫	日田市教育長	農業関連	旧石器～中世	98条の2
116	百枝陣箱遺跡	三重町大字百枝	大分県知事	道路	旧石器	57条の3
117	掘古森遺跡	挾間町大字古野	佛三栄都市	宅地造成	縄文・弥生	57条の5
118	瓦塚遺跡	宇佐市大字石田	宇佐市教育長	事務所建設	奈良・平安	98条の2
119	森山遺跡	三光村大字森山	大分県教育長	道路	弥生	98条の2
120	小路遺跡	香々地町大字見目	西高地方振興局	園場整備	中世	57条の6
121	別府遺跡	宇佐市大字中原	宇佐市長	道路	縄文・弥生・古墳	57条の3
122	横迫遺跡	荻町大字恵良原	荻町教育長	福祉建造物	弥生	98条の2
123	成恒城跡	三光村大字成恒	三光村教育長	総合グラウンド	古墳・中世・近世	98条の2
124	鴨山横穴墓群	三光村大字成恒	三光村教育長	総合グラウンド	古墳・中世・近世	98条の2
125	庵ノ尾横穴墓群	三光村大字成恒	三光村教育長	総合グラウンド	古墳・中世・近世	98条の2
126	塔ノ元・北原S	荻町大字木下	九州農政局	農業用管路	縄文	57条の3
127	八幡中学校遺跡	玖珠町大字太田	玖珠町長	学校	古墳	57条の3
128	小武寺	山香町大字小武	山香町長	公園整備	中世・近世	57条の6
129	赤迫遺跡	日田市大字田島	日田市長	公園造成	古墳・中世	57条の3
130	東光寺経塚群	杵築市大字横城	杵築市教育長	土砂採取	平安・中世	98条の2
131	玉沢遺跡	大分市大字宗方	大分県教育長	道路	弥生・中世	98条の2
132	吉松市場遺跡	安岐町大字吉松	大分県知事	園場整備	中世	57条の6
133	桜馬場遺跡群	三重町大字市場	佛久光	宅地造成	旧石器	57条の2
134	城下町遺跡	佐伯市大手町	佐伯市長	美術館建設	近世	57条の3

Ⅲ 各遺跡の調査概要

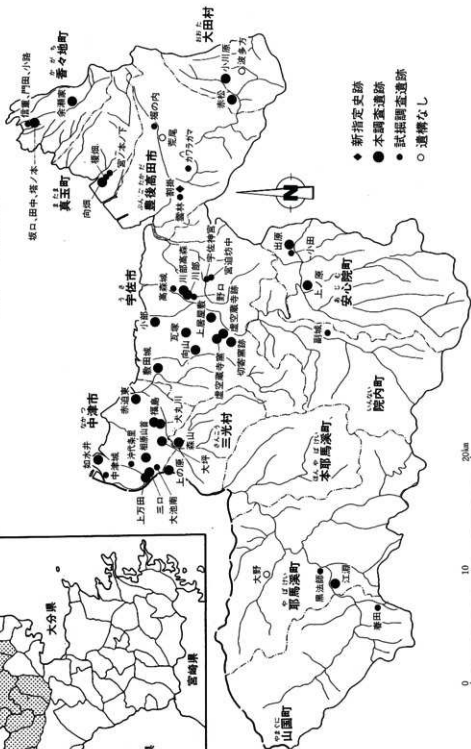
大分県域を、教育事務所管内にしたがって6地域に分け記載していく。

原則として本調査または重要遺跡については1頁、試掘調査等は半頁を割り当て、地図は国土地理院の5万分の1地形図を用いた。地図の真上が真北を指す。

各遺跡の概要の執筆は調査担当者がおこない、文責は文末に記す。



中津・宇佐地域

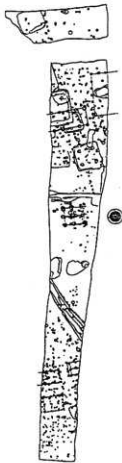


1. ^{みくち}三口遺跡

所在地 中津市大字相原388ほか
 調査原因 市道建設
 調査期間 930420～930930
 調査主体 中津市教育委員会

調査面積 5,000㎡
 担当者 栗焼憲児
 処置 工事実施
 台帳番号 101041

位置 中津市南部の山国川の自然堤防上に立地する。遺跡の南から北に微高地が続き、遺跡のすぐ北には、相原廃寺の寺域が広がる。



遺構配置

三口遺跡位置図
(地形図「中津」使用)

遺構 竪穴住居7
 掘立柱建物8
 溝2
 柱穴多数

遺物 竪穴住居からは6世紀の須恵器が、掘立柱建物の柱穴から10世紀の土器が出土した。土坑か



発掘状況

ら8世紀から10世紀にかけての良好な土師器の一括遺物が得られた。また、墨書をほどこした土師器の坏が出土した。

まとめ 調査区の西側に竪穴住居が集中している。掘立柱建物は西半分と東半分では様相が違い、西のものは柱穴が大きくしっかりしている。当地は相原廃寺から近く、掘立柱建物群や墨書土器が出土したことから、寺との関係も注目される。(栗焼)

2. 福島遺跡群

所在地 中津市大字福島1022
 調査原因 九州電力の鉄塔建設
 調査期間 931106～940228
 調査主体 中津市教育委員会

調査面積 200㎡
 担当者 栗焼憲児
 処置 工事実施
 台帳番号 101050

位置 中津市の南東部、標高24m程の微高地に位置する。従来中津市域では弥生時代の良好な遺跡が確認されていなかった。その中で福島一帯では八丁遺跡、犬丸川流域遺跡群第7地点などで弥生時代中期の資料が散見されており、注目していた地域であった。

遺構 土墳墓 15
 カメ棺墓 1
 石蓋土墳墓 1
 土器団墓 1
 土墳 3

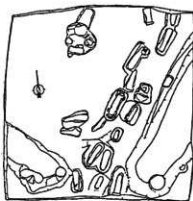
遺物 2号土墳から、弥生時代中期前半～後半の土器が大量に出土した。器種は壺、甕、高坏などバラエティーにとんでいる。

まとめ 当遺跡は弥生時代中期前半の墓地群で、中津地方では初めての調査例として注目される。13基の墓は二列埋葬の形態をとり、2号土墳はこれに伴う祭祀土墳とおもわれる。出土した土器は弥生時代中期の一括資料として、豊前地域の標識となる良好なものであった。

(栗焼)



福島遺跡位置図
 (地形図「中津」使用)



遺構配置図

3. 相原山首遺跡 (概報では永丞遺跡として報告、遺跡名変更)

所在地 中津市大字相原字山首
 調査原因 火葬場建設
 調査期間 931020～940329
 調査主体 中津市教育委員会

調査面積 5,000㎡
 担当者 栗焼憲児
 処置 工事実施
 台帳番号 新発見

位置 遺跡は「下毛原台地」とよばれる洪積台地上の東部に位置する。周辺には主に古墳時代の遺跡が分布し、眼下には沖代平野の南の最深部に位置する相原廃寺がみおろせる。

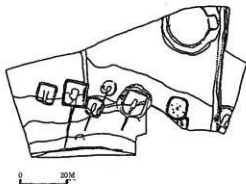
遺構 円墳 1
 方墳 7
 方形周溝墓 1
 火葬墓 16
 土壌 7

遺物 5世紀中頃の円墳から埴型はそうと広口壺、方墳からは平瓶や高台付き碗、低脚の高坏等が出土した。火葬墓からは須恵器の蔵骨器、中世の土壌墓からは白磁の碗、皿、短刀が出土した。

まとめ 古墳と火葬墓を年代別に並べると、5世紀に円墳、7世紀から9世紀に方墳が作られ、途中8世紀後半に火葬墓へ変化する過程が確認できる。周辺の助助野地遺跡、幣旗邸古墳、上ノ原横穴墓群とあわせると、5世紀～9世紀に至る中津地方の墳墓構造の変遷をたどることができる。



相原山首遺跡位置図
 (地形図「中津」使用)



遺構位置図

(栗焼)

文献：栗焼憲児「中津地区遺跡群発掘調査概報VI」中津市教育委員会、1993

4. ^{じょうずい} 如水井

所在地 中津市大字大塚277-2
 調査原因 県道建設
 調査期間 930317~930331
 調査主体 中津市教育委員会

調査面積 300㎡
 担当者 栗焼憲児
 処置 工事実施
 台帳番号 新発見

位置 海岸近くの平野部に位置する。ここは天正15年黒田孝高(如水)が豊前に入国し、翌年中津城の造営を開始した際、自らの居館を構えた場所である。この時いくつか設けられた井戸の一つがこの「如水井」といわれている。

遺構 井戸 1

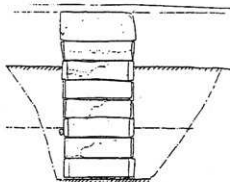
遺物 最低面から17世紀の染付出土

まとめ 井戸は上部に切石を四角形にくりぬいた枠をのせ、以下7段にわたり板状の石を四角形に組んで作られている。一辺は約120cmで高さ約3mになる。しかし、井戸枠は六角形であるという記録があるにもかかわらず四角形であることや、後世にこのあたりを削って城下を埋め立てたともいわれ、その評価に疑問の声もあがっている。

(栗焼)



如水井遺跡位置図
 (地形図「中津」使用)



井戸測量図

いぬまるがわ
5. 犬丸川流域遺跡群 (第6地点・第8地点)

所在地 中津市大字伊藤田3640ほか
調査原因 河川改修
調査期間 930420～940331
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 10,000㎡
担当者 栗焼憲児
処置 工事実施
台帳番号 新発見

位置 両地点とも中津市南東部の犬丸川の氾濫原に位置する。第6地点は尾崎川上流の左岸にあり、前年度より引き続いての調査である。また小平橋下流の左岸を第8地点として確認調査を実施したが、特に遺構、遺物などは認められなかった。以下、第6地点のみ報告する。

遺構 溝 7
土壇 11
井戸 1

遺物 6世紀の土器若干

まとめ 注目されるのは6世紀末とおもわれる大溝である。犬丸川の旧流路である可能性が高く、当時は犬丸川がかなり蛇行しながら周辺地の沖積面を形成していた過程を知ることができる。(栗焼)



犬丸川流域遺跡群位置図
(地形図「中津」使用)



完掘状況 (第6地点)

6. おおつぼ大坪遺跡

所在地	中津市大字加来825-1ほか	調査面積	約1,200㎡
調査原因	九州電力の変電所建設用地	担当者	栗焼憲児
調査期間	930719～930819	処置	工事実施
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101072

位置 中津市の南東部、犬丸川流域の自然堤防上に立地する。標高25mほどの微高地である。

遺標 溝 5
井戸 1

遺物 弥生時代中期の土器片
井戸からは木片出土

まとめ 本遺跡の歴史的評価については遺跡の全体像を検出していないため即断できないが、近接する樋多田遺跡などの状況から判断して犬丸川旧流路にかかわるものであろうと想定できる。(栗焼)



大坪遺跡位置図
(地形図「中津」使用)

7. あかさこひがし赤迫東遺跡

所在地	中津市大字赤迫683	調査面積	3,000㎡
調査原因	圃場整備	担当者	栗焼憲児
調査期間	931020～940329	処置	工事実施
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	新発見

位置 中津市の東部、犬丸川下流の左岸平野部に位置する。

遺構 溝1条と多数の柱穴が検出された。溝は東西にのび、西側で直角にまがり、方形の区画をもつ。溝の内側には柱穴群が確認された。

遺物 溝の西側のコーナーより、瓦器碗の完形品が出土した。12世紀末～13世紀初の所産で、溝は中世の居館に伴うものと考えられる。(栗焼)



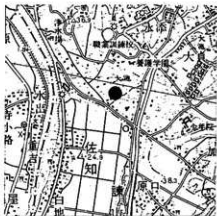
赤迫東遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

8. 大池南遺跡

所在地 中津市大字永添2110-8ほか
調査原因 専門学校建設
調査期間 930601～93
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 600㎡
担当者 栗焼憲児
処置 工事実施
台帳番号 101068

概要 中津市と三光村の境、「下毛原台地」の最南部に位置する。西には山国川をのぞみ、周辺には上ノ原遺跡や幣旗邸古墳などの遺跡が集中している場所である。当地域はゴルフセンター造成時に地山を相当削平しており、特に遺構は検出されなかった。(栗焼)



大池南遺跡位置図
 (地形図「中津」使用)

9. 亀山遺跡

所在地 中津市大字池永567-1・2
調査原因 宅地造成
調査期間 930517～930519
調査主体 中津教育委員会

調査面積 500㎡
担当者 栗焼憲児
処置 工事実施
台帳番号 101012 (亀山古墳として周知)

概要 遺跡は中津市中央北よりの標高17mあまりの微高地で、「下毛原台地」とよばれる洪積台地の最北部に位置する。亀山古墳という前方後円墳があった場所であるが、現在は削平されてあとかたもない。調査の結果、予想された古墳に関する周濠、墓廬などは検出されなかったが、古墳時代後期とみられる柱穴、土器片などを散見することができた。しかし遺跡の半分は後世の削平が大きいことから、本調査の必要はないものと判断した。(栗焼)



亀山遺跡位置図
 (地形図「中津」使用)

10. 沖代条里遺跡 おきだいじょうり

所在地 中津市中央町2丁目800-1ほか
調査原因 宅地造成
調査期間 930521～930524
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 400㎡
担当者 栗焼憲児
処置 工事実施
台帳番号 101007

概要 山国川によって形成された沖代平野では、奈良時代にすでに条里制がしかれたと考えられている。近年さかんに開発が進められており、その都度確認調査を実施している。調査の結果、基盤層は沖積平野特有の複雑な入り組みを見せたが、良好な溝状遺構2条、柱穴などが8世紀後半ごろの土器片を伴う状態で検出された。この結果遺跡の保存について協議をもったところ、計画されている構造物が遺跡の地下遺構に影響をおよぼさないものであることから、今回については本調査の必要はないと判断した。(栗焼)



沖代条里遺跡位置図
(地形図「中津」使用)

11. 中津城跡 (御用屋敷跡) なかつじょう ごようやしき

所在地 中津市1468 (京町)
調査原因 地区公民館建設
調査期間 930201～930331
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 1,571㎡
担当者 栗焼憲児
処置 平成6年度本調査
台帳番号 101002 (中津城下町遺跡として周知)

概要 調査区は、山国川河口近くにある中津城の東にある。1992年より中津市では内堀の一部復元を柱とした中津城跡保存整備計画の策定を行い、その実現にむけて準備を進めている。今回、内堀推定地に調査区を設定し、内堀の確認、及びその外側にある御用屋敷遺構の検出に努めた。その結果、調査区西側で内堀外側の石垣遺構を確認し、御用屋敷跡では建物基礎と考えられる遺構を検出したため、平成6年度本調査を実施することになった。(栗焼)



中津城跡位置図
(地形図「中津」使用)

文献：栗焼憲児「中津地区遺跡群発掘調査概報VI」中津市教育委員会、1993

12. ^{かみまだ}上万田遺跡

所在地	中津市大字高瀬	調査面積	600㎡
調査原因	道路建設	担当者	五十川孝正
調査期間	931122～931227	処置	調査後破壊
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	101022

概要 遺跡は大分県と福岡県の県境を流れる山国川の右岸自然堤防上にあり、昭和45年の団地造成の際に弥生時代後期から古墳時代の土器などが大量に出土した地点の南西に位置する。昨年度の調査では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての住居跡・土坑・土坑墓・石棺墓・溝などが検出された。本年度は昨年度の東側を調査することになった。表土を取り除いたところ、かなりの部分で礫層が堆積しており、遺構は確認できなかった。遺物は、礫層の中から須恵器片・瓦質土器片などが少量出土したにすぎなかった。

(五十川)



上万田遺跡位置図
(地形図「中津」使用)

文献：『上万田遺跡』大分県教育委員会、1993

13. 荒尾地区

所在地 豊後高田市大字^{たいりき}大力

調査原因 圃場整備

調査期間 940302～940328

調査主体 豊後高田市教育委員会

調査面積 約1,200㎡

担当者 河野典之・大久保謙一郎

処置 調査後破壊

台帳番号 102078 (荒尾・弘田条里のうち)

概要 荒尾地区は豊後高田市の北東部を占め、大字大力は両子山から放射状にのびる都甲谷に形成された都甲川と長岩屋川の合流地点の下流域南岸に位置する。周囲にはイセダ遺跡等の遺跡が存在し、古代から中世にかけての遺跡が存在する可能性があった。試掘調査の結果、遺構は確認されず、わずかな土器片が確認されただけで、それもほとんどはローリングされた小片であった。当地区のほとんどで耕作床土下層から砂質層がみられることから耕作地形成以前は河原であったと思われる。(河野・大久保)

文献：河野典之、大久保謙一郎「雲林遺跡・カワラガマ遺跡」『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報』X 豊後高田市教育委員会、1994.3



荒尾地区位置図
(地形図「鶴川」使用)

14. カワラガマ遺跡

所在地 豊後高田市大字佐野字カワラガマ

調査原因 圃場整備

調査期間 940201～940228

調査主体 豊後高田市教育委員会

調査面積 約2,000㎡

担当者 河野典之・大久保謙一郎

処置 次年度本調査

台帳番号 102093

概要 佐野地区は豊後高田市のほぼ中央部を占め、遺跡は両子山から放射状に伸びる谷によって小盆地状に形成された台地のほぼ中央部にある高台上に位置している。この地には過去に古代の平瓦が出たカワラガマ遺跡が周知されており、各時代の遺跡が存在する可能性があった。試掘調査の結果、高台の南西部において溝のコーナーが検出され、中央部においてもこれに連なると思われる溝を検出した。これらは館の周りを形成する溝と思われ、遺物は少量しか出土しておらず現在整理中であるが、ほぼ中世に当てはまるものと思われる。

次年度本調査を行う予定である。

(河野・大久保)



カワラガマ遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

文献：河野典之、大久保謙一郎「雲林遺跡・カワラガマ遺跡」『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報』X 豊後高田市教育委員会、1994.3 P 9～11

15. 雲林遺跡

所在地 豊後高田市大字来繩字雲林
調査原因 圃場整備
調査期間 930608～930831
調査主体 豊後高田市教育委員会

調査面積 約600㎡
担当者 河野典之・大久保謙一郎
処置 現状保存
台帳番号 新発見

概要 来繩地区は豊後高田市の西部を占め、遺跡は応利山から桂川にむかってゆるやかに傾斜していく台地上に位置する。周辺には割掛遺跡、ソノ田A・B遺跡等の遺跡が連なっており、十分遺跡の存在する可能性があった。試掘調査の結果、調査区南側の集落に近い位置より土墳墓が1基のみ確認され、内部より呑口式の柄をもつ小刀が出土した。小刀の特徴から判断して鎌倉時代のものであると考えられる。土墳墓の北側には遺構が見られないことから、遺跡は南側の現集落の下へ続くものと思われる。

(河野・大久保)



雲林遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

文献：河野典之、大久保謙一郎「雲林遺跡・カワラガマ遺跡」『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報』X 豊後高田市教育委員会、1994.3 P5～8

16. 堀の内遺跡

所在地 豊後高田市大字長岩屋字堀の内
調査原因 道路拡幅
調査期間 930608
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 150㎡
担当者 玉水光洋
処置 計画通り工事
台帳番号 102103 (寛城跡として周知)

概要 大友一族で都甲荘の支配を確立した吉弘氏の館跡ではないかといわれる場所ので、「堀の内」と呼ばれている。中心部は中学校敷地内であるが、校庭側の斜面に土塚が確認され、多量の土師器が混入する状況が明らかとなり、周辺の表面には備前焼、白磁、土師器片が散布していたため、道路拡幅部を試掘した。その結果、柱穴及び数点の土師器が検出された。

(玉水)



堀の内遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

うえのはる
17. 上ノ原遺跡

所在地	下毛郡三光村大字佐知	調査面積	約1,000㎡
調査原因	道路建設	担当者	植田由美
調査期間	930402～930910	処置	調査後破壊
調査主体	三光村教育委員会	台帳番号	103001

位置 遺跡は山国川を見下ろす通称、下毛原丘陵と呼ばれる丘陵上に位置している。この遺跡の東側わずか50mの所には上ノ原横穴墓群が所在しており、また眼下には横穴墓に埋葬された人々の集落の一つと考えられる佐知久保畑遺跡が所在している。

遺構 弥生時代中期の住居跡、貯蔵穴、溝状遺構

遺物 住居跡では弥生時代中期の壺の破片等が出土している。溝状遺構ではわずかに土器を採取したにすぎない。

まとめ 今回の調査は調査面積も狭く遺跡全体を確認することはできなかったが、溝状遺構の分岐点と考えられる部分が見つかっている。遺構は丘陵の西側に向かって広がっていると考えられ、また溝状遺構の一部は丘陵に沿って延びており、現地表面からも地形のわずかな窪み等で遺構を推定することができる。 (植田)



上ノ原遺跡位置図
(地形図「中津」使用)



完備状況

18. 森山遺跡

所在地	下毛郡三光村大字森山	調査面積	約3,000㎡
調査原因	洋ラン農場の移転	担当者	植田由美
調査期間	930925～940131	処置	調査後破壊
調査主体	三光村教育委員会	台帳番号	103012

位置 遺跡は村の南側にある八面山から北側の周防灘に向かって延びている丘陵のほぼ先端に位置している。遺跡の南側では既に本遺跡の一部が調査済みであり、弥生時代前期末から中期後半までの竪穴、土壌墓等が確認されている。

遺構 弥生時代中期から後半の住居跡、土坑。7世紀前半の住居跡。
火葬墓1基。

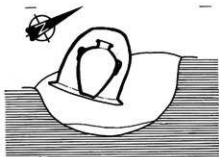
遺物 弥生時代中期後半の土器については口縁部が「く」の字状で、口縁端部をつまみ上げるタイプと口縁部がやや下がり気味の鋤先口縁をもつタイプの土器が出土。7世紀前半の住居跡からは須恵器の高坏等が出土。

まとめ 今回の調査では弥生時代の住居跡のみでなく、7世紀前半の住居跡も確認された。

火葬墓については1基確認されただけであり、単独で営まれたものとする。

(植田)

文献：植田由美「森山遺跡」三光村教育委員会、1994.3



火葬墓

19. 江淵遺跡

所在地 下毛郡耶馬溪町大字宮園字江淵
 調査原因 耕作で発見
 調査期間 931012
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 15㎡
 担当者 高橋信武
 処置 埋め戻し
 台帳番号 新発見

概要 遺跡は山国川流域の河岸段丘上にあり標高は170m前後である。一段下に開けた水田地帯には弥生時代ほかの米羽遺跡がある。江淵遺跡は畑地として利用されており、今夏8月に耕作中に石棺が発見された。その際、内部は床面近くまで掘り上げられ、周辺は石棺を取り巻くように掘り下げられた。

そのままにしておくわけにはいかないので、床面を出し、掘り上げられた部分をのけたところ、東部に赤色顔料が分布し西側で鉄鍬1点が出土した。周辺をトレンチ調査した結果、南側に幅1.5mの溝を検出した。

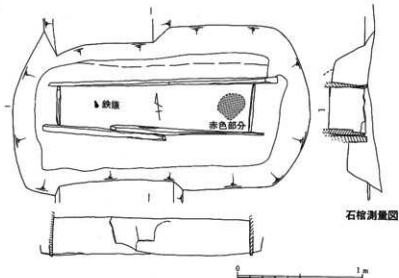
鉄鍬は幅3.3cmで茎を欠損する。5C後半～6C前半に多い形である。(高橋)



江淵遺跡位置図
 (地形図「耶馬溪」使用)



鉄鍬



石棺測量図

20. 黒法師遺跡

所在地 下毛郡耶馬溪町大字樋山路字黒法師
調査原因 県営圃場整備耶馬溪南部地区
調査期間 931001～931007
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 7 ha
担当者 吉田 寛
処置 盛土保存
台帳番号 新発見

概要 遺跡は山国川の支流である横樋川の両岸に発達する河岸段丘上に位置する。試掘調査は任意に設定したトレンチ15箇所を、重機と人力を併用して掘り下げる方法を取った。その結果、一部のトレンチで弥生時代中期後半の土器を含む包含層を確認した。工事は予定どおり行ない、包含層の確認された地点は盛土保存とした。(吉田)

文献：吉田寛「黒法師遺跡」『大分県内遺跡発掘調査概報2』大分県教育委員会、1994



黒法師遺跡位置図
(地形図「耶馬溪」使用)

21. 大野遺跡

所在地 下毛郡耶馬溪町大字大野字向井
調査原因 圃場整備
調査期間 931004～931017
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 600㎡
担当者 高橋信武
処置 計画通り工事
台帳番号 新発見

概要 調査対象地区は山国川の支流である津民川流域の河岸段丘上の水田地帯である。工事対象地は津民川の蛇行に合わせて左右に分布する。

右岸の柚木地区では7ヶ所トレンチ調査したところ、近世の遺物が若干出土した。

津民川にかかる橋の南側一帯の向井地区で6ヶ所を試掘したところ遺構は確認できなかったが中近世の遺物が少量出土した。工事がすでに先発していたため、小学校南東側の地区で17世紀の肥前産染付その他を採集した。(高橋)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報2』大分県教育委員会、1994



大野遺跡位置図
(地形図「耶馬溪」使用)

22. はるた 春田遺跡

所在地 下毛郡山国町大字春田
 調査原因 県営圃場整備
 調査期間 931102
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 500㎡
 担当者 後藤一重
 処置 予定通り工事
 台帳番号 106007

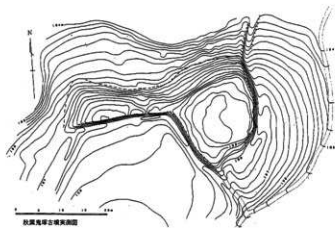
概要 遺跡は山国川の支流である春田川沿いに開けた谷平野に所在する。ここでは、かつて柱状方刃石斧が採集されたことから春田遺跡として周知されている。本年度は川の右岸部が圃場整備事業の対象地となったため、重機を使用し試掘調査を行った。その結果、かなり密に調査区を設定したにもかかわらず若干の土器片が出土したのみで、遺構は確認することができなかった。かつての水田造成などにより遺跡の価値が失われたものと判断し、計画通り事業を進めた。(後藤)



春田遺跡位置図
 (地形図「耶馬溪」使用)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報2』大分県教育委員会、1994

column ①



前方部南側から後円部の東側にかけて大きく削平を受けているが、実測図から全長45m、前方部約21m、後円部約24mに復元できる。

菅石と思われる円礫が一部で集中してみられるが、埴輪の有無や主体部については不明である。三重町内にはこの秋葉鬼塚古墳を含めて6基の前方後円墳があり、県下でも特異な地域として注目される。

新指定史跡の紹介 ① 県史跡秋葉鬼塚古墳

23. 川部・高森古墳群 (寺の上・池の端地区)

所在地 宇佐市大字川部字寺の上、池の端
 調査原因 風土器の丘内遺構確認
 調査期間 930513～931102
 調査主体 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

調査面積 3,500㎡
 担当者 真野和夫・中須賀真美
 処置 埋め戻し保存
 台帳番号 107070

位置 駅館川右岸の河岸段丘上、宇佐風土記の丘の敷地南部に位置する。標高30m。

遺構 1区 円墳(周溝のみ・直径約10m)

	1基
小形方形墳	4基
木棺墓	1基
素掘井戸	1基
2区 石棺	1基
方形墳	1基(部分)
3区 方形墳	3基

1区の木棺墓および3区方形墳1基の主体部(石棺)の調査を行った。他は痕跡のみである。木棺墓は底が丸い形状となるもので、半截の丸木(復元直径約34cm)を挟り込んで造ったものとみられる。墓墳の大きさは長軸が223cm、短軸が112cmである。3区の石棺は安山岩の板石を組み合わせたもので、規模は内法で長軸が170cm、短軸が頭位で40cmある。北側頭位で粘土枕をもち、床は玉砂利を敷く。

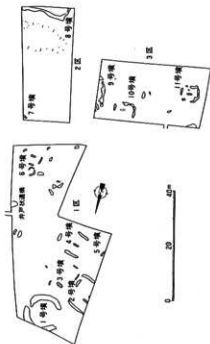
遺物 木棺墓から刀子1、石棺から刀子1・鏃5が出土した。

まとめ 調査地点はいずれも畑地で、耕作あるいは部分的には土取り(2区では昭和52年の土取り前に石棺と土壇墓を調査)のために全体として遺構の残りが悪いが、ほぼ全面に古墳が存在したことを確認した。時期は5世紀代とみられる。(真野)

文献:『宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報1993年度版』宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、1994



川部・高森古墳群位置図
(地形図「宇佐」使用)



遺構配置図

24. 切寄瓦窯跡

所在地	宇佐市大字山本字宮ヶ谷	調査面積	約50㎡
調査原因	重要遺構の確認	担当者	小倉正五・林 一也・佐藤良二郎
調査期間	940207～940324	処置	埋め戻し
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107136（切寄遺跡として周知）

位置 丘陵と河川が接した険しい地形をなす駅前川の市域上流部にある。窯跡は西岸の丘陵に生じた谷の北側斜面に立地している。白鳳時代創建の虚空蔵寺跡より南西約600mに位置する。

遺構 北大道路建設に伴う調査で2基が検出されており、その東側で発見されたものが3号瓦窯跡である。現存長5.3m、幅1.2m、高さ約4.2mで主軸はN64°Eである。焚口は1号同様に石組みである。

遺物 前庭部で8世紀前半頃の土師器碗1点、また焚口の左側面に完形の平瓦8枚が立て掛けられていた。

まとめ 虚空蔵寺跡の西側丘陵から3ヶ所7基の瓦窯が発見されたことになる。当地域に所在する古代寺院と生産遺跡との関係などが具体的に検討されるようになった意義は大きい。（佐藤）

文献：佐藤良二郎「切寄瓦窯跡確認調査」「宇佐地区遺跡群発掘調査概報」P22～26
宇佐市教育委員会、1994.3



切寄瓦窯跡位置図
（地形図「宇佐」、「豊岡」使用）



切寄瓦窯跡検出状況（右側が3号。昨年度発掘した左側の2基はウレタンによって保護されている。）

かわらづか
25. 瓦塚遺跡

所在地	宇佐市大字石田字瓦塚	調査面積	約150㎡
調査原因	社屋建替	担当者	林 一也
調査期間	931226～940112	処置	埋土により遺構保存
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107126

位置 宇佐平野中央部の四日市市街地の東部に位置している。これまでに周辺部より法隆寺式軒平瓦などが採取されており、四日市廃寺跡の推定地として注目されていた。

遺構 溝……幅3.5m、深さ2mで長さ20mを確認
井戸? ……一辺約3mの方形土坑1基
井戸 ……一辺約3cmの方形土坑3基
柱穴群など

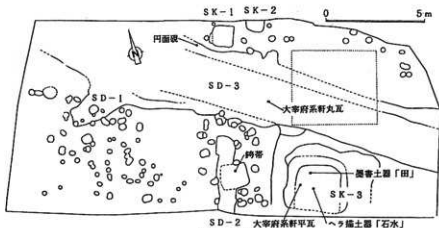
遺物 各遺構から8世紀後半～9世紀初めの須恵器や土師器の碗、杯、皿、壺などが出土している。これら以外の主要遺物として以下のものがある。

- ・溝より円面硯、大宰府系軒丸瓦（老司式）
- ・井戸より墨書土器「田」、ヘラ描土器「石水」大宰府系軒平瓦（老司式）
- ・一辺約80cmの方形土坑より革帯の銅製飾り金具である鈎帯金具および裏金具（2.8×3cm）

まとめ 瓦塚遺跡はこれまで寺跡などの遺構が存在する可能性が考えられていた。しかしながら、今回の調査で出土した鈎帯金具は奈良時代の官位制度にもとづく使用規定により郡役所の大領などが身につけていた可能性がある。さらに、瓦は豊前の国府や国分寺が存在した福岡県京都郡地方から出土する大宰府系文様のものを採用しており、これまで宇佐で発見されている寺院のものとは異なっている。以上より、瓦塚遺跡は宇佐郡の郡衙の可能性が高くなったと言える。（林）



瓦塚遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)



遺構分布図

26. 小部遺跡

所在地	宇佐市大字荒木字小部	調査面積	約300㎡
調査原因	重要遺構の確認	担当者	佐藤良二郎・川谷 浩・江藤和幸
調査期間	940202～940303	処置	一部調査後、埋め戻す
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107018

位置 四日市市街地から北方約3kmにあり、駅館川西方に広がる沖積地と接した、標高約8mの低位段丘東端部に立地している。小河川の黒川に面しており、約2km上流には5世紀後半の葛原古墳がある。

遺構 遺跡南端部の調査区では、既往調査で確認している古墳時代前期の環溝（環溝集落）の一部（幅2～2.5m、深さ0.9m、長さ50m）や並行する布掘溝1条（途中で消滅）など。また、奈良～平安時代の土坑7基、多くの柱穴など。

遺跡東端部の調査区では溝1条や土器埋納坑1基など。

遺物 遺跡南端部の調査区で検出した環溝の一部からは甕や壺を主体に高坏などが出土する。また東端部の調査区からは家形か桶形埴輪の一部と考えられる埴輪片1点が出土する。土器埋納坑は須恵器の瓶子形壺に土師器の坏を蓋としている。

まとめ 今調査は環溝の南側プランや埴輪を伴う遺構の探査が目的であった。環溝の南辺はほぼ直線的に東側に延びることが明らかになり、布掘り溝は削平のためか消滅していた。また遺跡東端部から埴輪が1点出土したが、その遺構については十分な成果が得られなかった。さらに土器埋納坑は地鎮儀礼に伴うもの、蔵骨器、袍衣埋納遺構などの可能性が考えられるが、現段階ではいずれとも推測しがたい。

（佐藤）

文献：佐藤良二郎「小部遺跡10次調査」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』P3～7 宇佐市教育委員会、1994.3



小部遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)



小部遺跡の環溝

27. 上居屋敷遺跡

所在地	宇佐市大字別府 ^{びつ} 字上居屋敷 ^{かみいやしき}	調査面積	約5,000㎡
調査原因	道路改良	担当者	小倉正五・乙呷政己・林 一也・ 佐藤良二郎・川谷 浩・江藤和幸
調査期間	930802～940228	処 置	調査後破壊
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107128 (別府遺跡として周知)

位 置 遺跡は法鏡寺交差点の南約800mに位置する。駅館川の左岸低地に発達した微高地上に立地している。遺跡の北側は朝鮮式小銅鐸が出土した別府遺跡であり、近年の調査で環溝を伴う集落であることが明らかになっている。また南側は縄文早期・弥生中期・古墳後期・奈良～平安の集落が発見された中原遺跡、墨書・へら書き土器が多く出土した穴井遺跡などが分布している。



上居屋敷遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

遺 構 屋敷地を囲むと考えられる石垣を伴う区画溝(幅25m、長さ40～50m)が南北に6基整然と並んでいる。

中世墓	1基
近世墓	9基
近世井戸	2基
掘立柱建物跡	2棟

遺 物 16世紀頃の瓦質・土師質の摺鉢や握鉢。
肥前産の陶磁器(17～19世紀頃)
寛文7年(1667)～明和7年(1770)銘のある墓石(寄墓)

まとめ 6基の区画溝は中世方形館に類似した特徴を有している。つまり、溝からは多くの日用的な土器が出土し、内部に井戸や墓地が造られている。これらのことから屋敷地を区画した溝であることが考えられ、中世以来の集落形態が近世まで引き継がれていることが明らかになった。(佐藤)



遺構分布状況

文献：佐藤良二郎「上居屋敷遺跡」『宇佐の文化』39号 宇佐の文化財を守る会、1994

28. ^{かわべ}川部遺跡

所在地 宇佐市大字^{かわべ}川部字等ノ内
 調査原因 市道拡幅
 調査期間 930721～930806
 調査主体 宇佐市教育委員会

調査面積 約280㎡
 担当者 佐藤良二郎・川谷 浩
 処置 調査後一部破壊
 台帳番号 107070

位置 川部遺跡は駅館川の東側台地上に立地する。弥生前期末～中期初頭の環溝を伴う集落や列状に分布した墳墓群、国指定史跡川部・高森古墳群と一体をなす古墳群等の複合遺跡は、宇佐市総合運動場として生まれ変わり、競技場等のスポーツ施設と歴史を学ぶ古代ふれあい広場が、ドッキングした市民憩いの広場として活用されている（43ページ写真）。多数の往来利用者に備えた道路整備のため川部遺跡北端部の市道（幅約4m）の一部を幅約6m拡幅する。



川部遺跡位置図
 (地形図「宇佐」使用)

遺構 調査区は西側に環溝（弥生時代前期末～中期初頭）北端部が隣接し、また東側に既に拡幅工事済みの墳丘を失った5～6Cの方形墳や円墳が発掘調査されている。そして南側に16C頃と考えられる南北に走る数条の溝が確認されている。これら重要遺構の分布確認の必要からやや広範囲に表土剥ぎをした。
 墳丘を失った円墳（6C頃）1基、不定形土坑1基、多くの柱穴を検出した。溝は東側に大きく曲がった後、攪乱等のためか無くなっている。この中で、東側に曲がる溝1条、不定形土坑1基を発掘した。

遺物 不定形土坑……土師器片
 溝 ……瓦質土器（佐藤）

文献：佐藤良二郎「川部遺跡」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』宇佐市教育委員会、1992



遺構検出「状況」

29. 虚空蔵寺跡

所在地 宇佐市大字山本字経堂
 調査原因 重要遺構の確認
 調査期間 930416～940328
 調査主体 宇佐市教育委員会

調査面積 約200㎡
 担当者 小倉正五・佐藤良二郎・江藤和幸
 処置 埋め戻し
 台帳番号 107135

位置 駅館川の市域上流部左岸に位置する。西側は低丘陵が発達しており、東側は河川と接しているため狭小な地形に立地していることになる。西側丘陵部の3ヶ所で7基の瓦窯跡の分布が明らかになっている他、北側隣接地では大型の独立柱建物跡や井戸などの関連遺構が調査されている。

遺構 中門跡の調査では、柱座削り出しの礎石2基（3・4号礎石）が出土。また西側に続く回廊の基壇の一部と考えられる遺構。それらに伴う瓦溜遺構。南門に伴うと考えられる溝。講堂跡の調査では、講堂基壇北東コーナーを検出する。

この他、回廊南側で鍛冶炉1基が出土。

遺物 平瓦や丸瓦を主体として、法隆寺系軒平瓦（1式）、川原寺系軒丸瓦、新羅系文様の軒平瓦、熨斗瓦、面戸瓦、鬼瓦、埴仏などが出土。

まとめ 今年度調査の成果は回廊の可能性のある遺構を確認したこと、中門跡で3基目の礎石を検出したこと、また南門に続くと考えられる溝及び築地状の遺構を検出したことなどである。さらに近年の国道バイパス建設に伴う調査で西側丘陵の3ヶ所で7基の瓦窯跡が発見されたことなどから、今後は寺院造営に関する研究が大きく前進するものと期待される。

（佐藤）

文献：小倉正五「虚空蔵寺跡8次調査」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』宇佐市教育委員会、1994



虚空蔵寺跡位置図
 (地形図「宇佐」、「豊岡」使用)



遺構・遺物検出状況

30. 虚空蔵寺跡

所在地	宇佐市大字山本字経堂	調査面積	約150㎡
調査原因	住宅改築	担当者	林 一也
調査期間	930408～930426	処置	埋土により遺構保存
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107135

位置 宇佐平野の中央部を流れる駅館川上流左岸に位置する虚空蔵寺跡は、これまでの発掘調査により法隆寺式伽藍配置を持つ白鳳寺院として知られている。また、九州で唯一埵仏を出土しており、周辺には創建時の瓦を生産した瓦窯跡が3カ所より7基確認されている。

調査は講堂北側においてトレンチを4ヶ所設定して実施した。

遺構 講堂北側基壇遺構である版築と凝灰岩の地覆石列が検出された。その前面には化粧として3枚程度の瓦を重ねて並べていた。この石列は約6.5m東側まで延び、直径1mほどの攪乱を被っていた。しかし、その先には石列が認められなかったため、攪乱部分に講堂基壇の北東コーナーが存在していたことになる。

遺物 大量の瓦とともに埵仏片が1点出土している。

まとめ 今回の調査によって講堂基壇の南北の寸法と東端部が明らかになった。これによる奥行は約17.5m、間口は26m以上（西側未確認）となる。（林）

文献：『虚空蔵寺跡8次調査』『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』宇佐市教育委員会、1994



虚空蔵寺跡位置図
(地形図「宇佐」、「豊岡」使用)



基壇検出状況

31. 虚空蔵寺^{こくぞうじ}2～4号瓦窯跡

所在地	宇佐市大字山本字狐坂 ^{やまもと ぎつせがき}	調査面積	約1,200㎡
調査原因	道路建設	担当者	林 一也
調査期間	931128～940331	処置	2号窯埋土・3号窯取上
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	新発見

位置 宇佐平野の中央部を流れる駅館川上流左岸に位置する虚空蔵寺跡は、これまでの発掘調査により法隆寺式伽藍配置を持つ白鳳寺院として知られている。2～4号瓦窯跡は寺跡の北々西約220mに位置する狭小な谷の南側斜面上に立地している。

遺構 寺院創建時の瓦窯3基と1基の炭窯が検出された。2号窯は半地下式有階無段登窯で遺存する長さは3.5m、幅は1.3mを測る。床面の壁際には天井部築造時の骨組材を差し込んだ柱穴が検出されている。3号窯は地下式有階有段登窯で遺存する長さは4.0m、幅は1.3m、深さ0.9mを測る。階段は丸瓦を並べて造られており、5段確認されている。8世紀後半には階段を埋め、須惠器を生産していることが確認された。2・3号窯は同じ排水溝で囲まれている。4号窯は半地下式有階無段登窯で遺存する長さは3.0m、幅は1.2m、深さ0.3mを測る。炭窯は遺存する長さは11.6m、幅は0.7m、深さ0.8mを測る。45×35cmの横口が2個確認された。調査区内において江戸時代に掘られた柱掛井手（水路）も確認されている。

遺物 特徴的なものとして、2・3号窯および灰原より法隆寺系軒平瓦が、灰原より川原寺系軒丸瓦が出土している。灰原より出土した法隆寺系軒平瓦には互当文様のズレた完形品があり注目される。また、3号窯より一枚造りの特徴をもった瓦とともに8世紀後半代の須惠器などが出土している。

まとめ 同時操業と考えられる2・3号窯の構造の違いは、製作集団の違いによるものであると思われるが、炭窯より出土した遺物との関係については十分な検討が必要となる。（林）

文献：「虚空蔵寺遺跡」『一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』宇佐市教育委員会、1994



虚空蔵寺窯跡位置図
(地形図「宇佐」、「豊岡」使用)



第3号瓦窯跡全景

32. 向山古墳

所在地	宇佐市大字山下字真応寺山	調査面積	約400㎡
調査原因	土取り造成	担当者	佐藤良二郎
調査期間	930524～930623	処置	調査後破壊
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107109

位置 四日市台地西端部の標高約60mの丘陵上に立地している。伊呂波川が貫流する通称横山谷に面している。近接して4基の小円墳がある他、北に連なる丘陵の端部には桐ヶ迫・久々姥古墳群、糸口遺跡の方形周溝墓群などがある。また横山谷を挟んで対面する丘陵の中腹崖面には裝飾横穴を含む多くの横穴墓群の分布がみられる。

遺構 墳丘径約18mの小円墳で、墳頂部は後世の破壊を被っている。遺存状態は比較的良好であり、腰石に巨石を据え、両袖を有した横穴式石室墳である。墳丘は地山整形後に盛られている。墳丘築成は明らかでない。

遺物 玄室や羨道部から須恵器のほか、馬具・鉄鍔・ガラス玉などが出土し、前庭部から鉄鍔や玉類が出土している。また周溝より脚付子持ち壺(須恵器)などが出土している。

まとめ 出土遺物の年代は6C中～後半であり、前庭部の遺物出土状況などが考慮すると追葬の可能性も考えられる。

(佐藤)



向山古墳位置図
(地形図「宇佐」使用)



向山古墳検出状況

33. 敷田城跡

所在地	宇佐市大字中敷田	調査面積	約180㎡
調査原因	市道の遊歩道新設	担当者	川谷 浩
調査期間	930412～930416	処置	埋土保存
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107010

位置 敷田城は荻原氏の館城であり、宇佐市北西部の五十石川と伊呂波川にはさまれた平野部に位置する。北側と南側と西側に土塁と堀が残存している。「宇佐郡地頭伝記」等によると、応永年間(1394～1428)に荻原氏は大友氏より宇佐郡広山郷宮熊村(現宇佐市大字熊)と敷田村(同中敷田)が与えられ、豊後より入部し、宮熊村に館城を築城した。その後、天文年間(1532～1555)に敷田村の現位置に移したという。



敷田城跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

遺構 市道(幅約6m)の遊歩道(幅約2m)新設に伴い調査した。調査区(2×90m)は、市道付設時の工事等でかなり攪乱されていたが、北側の一部(2×14m)で遺構が検出された。溝3条、土坑3基、少数の柱穴等である。



遺構検出状況

遺物 瓦質土器、鉄鏝

まとめ 館城のほぼ中央を南北に横断する市道の遊歩道であるが、限られた調査範囲であり、また攪乱等で遺存状態が悪く、溝等より16C頃の遺物が出土したが、建物等は確認できなかった。(川谷)

34. のぐちいせき
野口遺跡

所在地	宇佐市大字上田字野口	調査面積	約30㎡
調査原因	個人住宅建築	担当者	佐藤良二郎
調査期間	940211～940214	処置	埋め戻し
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107073

概要 駅館川の東岸台地上に立地する、弥生時代中期を中心時期とした墓地である。昭和55～56年度の調査で約300基の土墳墓や石蓋土墳墓などと多量の土器が出土する祭祀土坑などが調査され、一部は県指定史跡として保存されている。調査地点は水田を挟み西側約100mに位置している。墳墓などは検出されなかったが、小ピットより完形の壺が出土するなど、東上田遺跡や川部遺跡で明らかになった中期後半の集落の一部である可能性が考えられる。(佐藤)



野口遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

35. たかもりじょうあと
高森城跡

所在地	宇佐市大字高森	調査面積	約2,000㎡
調査原因	土砂採取	担当者	江藤和幸
調査期間	930401～930430	処置	協議中
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107063

概要 天正15年に黒田利高により築城された市内最大の城郭で、現在でも大規模な堀や土塁を見ることができる。調査は昭和58～60年度に道路建設に伴う1次調査を、平成元～5年度にかけ土砂採取に伴う2次調査を実施し、当遺跡が旧石器時代から近代までのさまざまな時期の遺構が残る複合遺跡であることが判っている。

今年度は昨年度の調査を引き続き実施し、調査終了後、土地所有者との保存協議をするため遺構の埋め戻しを行った。(江藤)



高森城跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

36. 史跡宇佐神宮境内

所在地	宇佐市大字南宇佐	調査面積	約50㎡
調査原因	台風7号風倒木撤去	担当者	江藤和幸
調査期間	930819	処置	調査後埋め戻す
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107202 (宇佐神宮境内遺跡として周知)

概要 台風7号により、宇佐神宮の下宮境内においてイチイガシの巨木が転倒する災害が発生し、多数の土器の出土が確認された。出土した土器の多くは10世紀代の土師器の环や皿で、わずかながら8世紀後半の須恵器などが彌勒寺の古瓦などと共に出土している。

調査は風倒木を中心に最小限に止め、終了後埋め戻した。(江藤)



宇佐神宮位置図
(地形図「宇佐」使用)

37. 宮迫坊中跡

所在地	宇佐市大字南宇佐	調査面積	約30㎡
調査原因	市道拡幅	担当者	乙呷政巳
調査期間	930719～930730	処置	一部保存
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107202 (宇佐神宮境内遺跡として周知)

概要 宮迫坊中跡は宇佐神宮の南側に位置する。かつては真栗坊を中心に11の院坊が存在していた。現地は3条の往還を中心に往時の状況を良好に止めており、史跡宇佐神宮境内として国の史跡に指定されている。

今年度の調査は、昨年度の安門坊跡の南側、上蔵坊、下桐井坊などが存在していた部分について実施し、数基の柱穴や中世～近世の土器小片の出土をわずかながら確認した。

(乙呷)



宮迫坊中位置図
(地形図「宇佐」使用)

38. 副城跡そえじょう

所在地 院内町大字上副字大副
 調査原因 遺構確認
 調査期間 931129～931210
 調査主体 院内町教育委員会

調査面積 9,000㎡
 担当者 村上久和
 処置 埋め戻し
 台帳番号 108005

位置 院内盆地の東側を流れる恵良川の東岸標高約150m前後に位置する。副城はこれまでに土塁や塹堀の一部は知られていたがその全容については不明であった。

遺構 今回の調査で、この城跡は北側に二重の横堀を巡らし、東側から南・西側にかけては一重の横堀と21本の畝状空堀群を巡らしていることがわかった。また、山頂には南北に高さ6m前後の土塁を巡らし、東に虎口を配す約300㎡の主郭と考えられる曲輪が、北側中腹には南北に土塁を巡らし、東に石積みの虎口をもち約1,000㎡の第2曲輪が新たに発見された。この曲輪内には礎石建物が四棟前後検出された。この内の三棟には石積土坑が付設されている。

遺物 出土遺物には備前焼のカメ片、スリ鉢、土師質こね鉢などの土器片や鉄鎌、鉄タガネ等がある。

まとめ 副城については16世紀前半前後に活躍した宇佐郡地頭36人衆の一人、副鎮安・同宗澄などの居城として文献に認められていた。今回の調査で同時期の遺構が検出されたことで豊前地域の16世紀後半の典型的なものの一つであることが証明された。(村上)



副城跡位置図
 (地形図「豊岡」使用)



横堀

39. うえのはるくりがきこ上ノ原栗ヶ迫遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字久井田
調査原因 工場建設
調査期間 940228～940311
調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 約100㎡
担当者 野野勝教
処置 調査後破壊
台帳番号 新発見

位置 本遺跡は、通称上ノ原とよばれている安心院盆地東北の標高160mの台地上に位置する。南に安心院盆地が開け、この台地南側斜面下には東から西へと津房川が流れる。この台地は、昭和30年代から同40年代にかけて国営パイロット事業により畑地へと造成されている。この事業に伴って地元の住民が銅矛7本を発見し、弥生時代の遺跡をはじめ知る機会となった。



上ノ原栗ヶ迫遺跡位置図
 (地形図「豊岡」使用)

遺構 溝状遺構 1

ピット 20

製鉄炉跡 1

炉跡の上面は直径25cm、短径12cmの楕円形を呈し、深さ6cmである。断面はU字状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物 須恵器坏片

須恵器坏盖片

赤焼きの須恵器?



遺構検出状況

まとめ 昨年度の調査に引き続いて製鉄炉

遺構が検出された。昨年度検出された遺構は、その規模等から大鍛冶炉と想定したが、今回検出した遺構は、その規模等から小鍛冶遺構であると考えられる。

遺構の状況から3区画に分かれていたと思われ、製鉄に関連した一体の工房跡と考えられる。

(野)

文献：『安心院地区遺跡群発掘調査概報』安心院町教育委員会、1994

40. 出原遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字山蔵
 調査原因 圃場整備
 調査期間 931124～931216
 調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 500㎡
 担当者 野勝教
 処置 調査後破壊
 台帳番号 新発見

位置 本遺跡は安心院町の東北部に所在し、駅館川の上流佐田川へと注ぎ、東から西へと流れる山蔵川に流入する房ヶ畑川左岸の丘陵裾部に位置する。

遺構 掘立柱建物 1（3間×1間）、土壇6基を伴う。

柵列 1 掘立柱建物の西端を画する位置にあった。東西方向約6mに5間の間隔をもつ。

土壇 15 不整形、楕円形を呈する。規模は直径1m～2.2m幅0.4m=1.2mである。

ビット 多数

遺物 遺構に伴って瓦器碗片、小皿片等が出土したが、そのほとんどが破砕片であった。また、表土中より須恵器坏片等が出土している。

古銭 ビットより出土。「治平元宝」（铸造年西暦1064～1067年）と表面に陽銘。

まとめ 中世の掘立柱建物1棟と柵等が確

認された。同遺跡は、須恵器等の出土により奈良時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認された。今回検出した掘立柱建物は中世の建造物であることはほぼ間違いないが奈良時代の遺構については検出されなかった。

しかし、遺物は、覆土に含まれており、中世から近世での開墾時に奈良時代の遺跡が破壊された可能性が高い。

(野)

文献：『安心院地区遺跡群発掘調査概報』安心院町教育委員会、1994



出原遺跡位置図
 (地形図「豊岡」使用)



完備状況

41. ^{おだ}小田遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字山蔵
 調査原因 圃場整備
 調査期間 931203～931210
 調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 100㎡
 担当者 野野勝教
 処置 調査後破壊
 台帳番号 新発見

概要 本遺跡は、東西に山裾を開拓してつくられた集落のほぼ中央部南側に位置し、山裾部には、樹齢1,000年と推定される大イチイガシがある。

調査は、試掘調査によりピット等を検出した水田1区画において実施した。遺構は、耕作土及び基盤土直下の赤茶褐色粘土質土層において検出された。

遺構は、そのほとんどがピットであり建物等を想定するには至らなかった。遺物は、破砕片が多く時期を決定できるものはなかったが、瓦質土器片等も含まれており、中世以降の遺跡である可能性が高い。



小田遺跡位置図
 (地形図「豊岡」使用)

(野)

文献：「安心院地区遺跡群発掘調査概報」安心院町教育委員会、1994

column ②



復元整備された内川部遺跡

宇佐風土記の丘の隣接地にオープンした史跡公園、古代ふれあい広場は、古墳時代の住居や、墳墓が復元整備されており、市民の憩いの場所として親しまれている。

あかまつ 42. 赤松遺跡

所在地 西国東郡大田村大字上沓掛字赤松
調査原因 県道拡幅
調査期間 930804～930908
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 約800㎡
担当者 玉永光洋・綿貫俊一
処置 調査後工事
台帳番号 110037

位置 国東半島の中央部から放射状に広がる尾根と尾根にはさまれた谷部にあり、標高は約136m前後。桂川が谷の中央を南流する。遺跡は桂川の西側の河岸段丘上に立地する。付近には古代・中世において、東国東と西国東を結ぶ往還が通っている。なお遺跡の西側山腹には白髭神社がある。

遺構 平安時代の柱穴2、江戸時代の溝

遺物 深さ約150cmのところまで遺物包含層があった。旧水田層の下位にあるこの包含層の厚さは約30cmで、この包含層の下位は黄灰色の粘土層（自然層）である。遺物は平安時代の須恵器と土師器が中心で、他の時期の遺物は観察されない。



赤松遺跡位置図
 (地形図「鶴川」、「豊後杵築」使用)

まとめ 発掘内に隣接する部分にも良好な平地が残っており、遺構・遺物の存在が予想される。
 (縮貫)

column ③



遺構された木の遺跡

平成4年度に発掘調査された森の木遺跡は、大田村教育委員会により、土地取得、保存整備が行われた。

遺構は、中国製陶器を据えた小石室3基と、それをとりまく石敷遺構で、墓地であると考えられる。復元にあたっては、本物の石室の下部に排水施設を設け、実物を見学できるようにしている。

43. 小川原遺跡 (第2次調査)

所在地 西国東郡大田村大字上沓掛字小川原
 調査原因 圃場整備
 調査期間 930412～930530
 調査主体 大田村教育委員会

調査面積 3,900㎡
 担当者 高橋信武・後藤幹彦
 処置 計画通り工事
 台帳番号 110028

位置 小川原遺跡は大田村のほぼ中央部に位置し、国東半島から放射状に延びる桂川の左岸に広がる標高133m前後の水田地帯にある。

大田村では現在、桂川流域の水田地帯を対象とした泉宮圃場整備が継続中である。昨年度は隣接した上流域の古城得遺跡・岡の前遺跡で工事に伴う本調査を行なった。

本遺跡では昨年度末に遺跡の存在を確認し、協議の結果引き続き年度末の短期間に調査可能な範囲を対象に第1次発掘調査を行った。検出した遺構は全て弥生時代に属するもので、箱式石棺墓類12基、埋葬に伴う祭祀土坑1基であった。

今年度は末調査だった東・西・南側を拡張して発掘調査を行った。

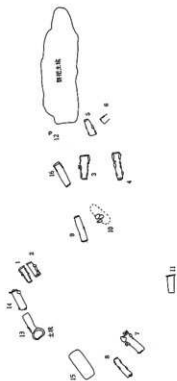
遺構 現代～近世の暗渠(溝、3期に分かれる)・中世の遺物を含む浅い谷部(谷Ⅱ)・古墳時代の遺物を含む浅い谷部(谷Ⅰ)・弥生時代の箱式石棺墓4基(第1次調査分と合わせて16基)・時代不明の溝1を検出した。これらの上位には礫層が覆っていた。

遺物 現代～近世(土管)・中世(中国製磁器)・古墳時代(土師器)・弥生時代(土器)

まとめ 弥生時代の墓群は同方向に整然と並んだもので、箱式石棺を主体とした墓地としては県内でも最古段階に属す。4辺を完全に板石で取り巻くものは少ない点や土器片で囲ったものの存在が特徴的である。(高橋)



小川原遺跡位置図
 (地形図「鶴川」、「豊後杵築」使用)



遺構配置図

44. 波多^{はたかた}方地区

所在地 西国東郡大田村大字波多方
調査原因 県営圃場整備
調査期間 930426～930428
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 500㎡
担当者 後藤一重
処置 予定通り工事
台帳番号 —

概要 調査対象地区は、国東半島中央部から北西の豊後高田市へ流れる桂川の支流沿いに展開する小谷平野である。縄文時代あるいは中世の遺跡の存在が予想されたため調査を行った。調査は川沿いの低い水田をのぞきほぼ全域に重機を用い調査区を設定し、作業員による精査を行った。その結果、若干の近世土器片が出土したのみで、遺構は確認されなかった。よって、工事の実施にあたり問題ないと判断し予定通り工事を着工した。（後藤）



波多方地区位置図
 (地形図「豊後杵築」使用)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2 大分県教育委員会、1994

column ④

豊のあけぼの展 (香々地会場)

平成5年12月4～5日にかけて香々地町役場で豊のあけぼの展を開催しました。入場者は680人でした。

展示内容は県内の旧石器時代から古墳時代の石器、土器、木器、青銅器、鉄器、解説パネル、香々地町の御古墳の短甲、地元の遺物も加えて300点余りを用いました。さらに、体験学習コーナーを設け貫頭衣の試着、石器の切れ味を試すなど大人にも人気のコーナーとなりました。



展示会場入り口



遺物展示

むこうはた
45. 向畑遺跡

所在地	西国東郡真玉町西真玉向畑	調査面積	5,500㎡
調査原因	圃場整備	担当者	下村精一
調査期間	930824～940315	処置	調査後破壊
調査主体	真玉町教育委員会	台帳番号	111017（真玉氏居館跡として周知）

位置 遺跡は真玉川の南側に広がる台地に位置する。この台地は西に舌状にのび、西端地区には大塚古墳を中心として古墳時代の遺跡が広がる。又以前は真玉側に沿って条里遺跡が確認されているが、今は跡を留めない。当遺跡は県指定史跡（真玉氏居館跡）のすぐ北側に位置する。

遺構 中世：土墳墓 20基、土壇 14基

掘立柱建物 21軒

溝 - 1条

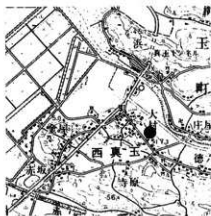
近世：溝 - 3条

墓 - 64基

遺構は調査区全体に広がり、中世期を中心とする。近世の遺構は墓地を主体とする。

遺物 旧石器時代のナイフ型石器、12～13世紀の土壇墓より青磁、その他土師器碗等。

（下村）



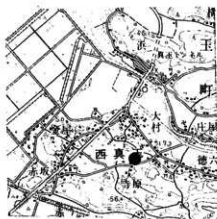
向畑遺跡位置図
（地形図「宇佐」使用）

又のきはた
46. 榎畑遺跡

所在地 西国東郡真玉町大字西真玉字榎畑
調査原因 圃場整備
調査期間 930216～930225
調査主体 真玉町教育委員会

調査面積 600㎡
担当者 下村精一
処置 一部保存
台帳番号 新発見

概要 遺跡は真玉氏居館跡遺跡の約200m南側に位置する。調査は圃場整備事業における水路工事箇所を中心とした範囲で試掘調査を行った。検出された遺構は柱穴で、掘立柱建物跡3軒を確認する。遺構は広範には広がらず小規模な物と考えられる。遺跡の取り扱いについては、削平する水路部分に限定して調査を進めた。又ほか部分に関しては確認するに留め現状のまま残すことにした。(下村)



榎畑遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

みやもと した
47. 宮ノ元ノ下遺跡

所在地 西国東郡真玉町大字西真玉字宮ノ元ノ下
調査原因 圃場整備
調査期間 931108～931122
調査主体 真玉町教育委員会

調査面積 325㎡
担当者 下村精一
処置 調査後破壊
台帳番号 新発見

概要 遺跡は真玉氏居館跡の南側に位置する。調査は工事において道路部分を対象に行い、土壌、全体からピットを検出するが、調査対象が小範囲であったため性格はつかみきっていないが、出土した土器片等より中世の所産であろう。(下村)



宮ノ元ノ下遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

48. 余瀬家庄屋敷跡

所在地 西国東郡香々地町大字長小野字大力坊
調査原因 保育所建設
調査期間 930724～930820
調査主体 香々地町教育委員会

調査面積 2,000㎡
担当者 村上久和
処置 埋土保存
台帳番号 新発見

位置 遺跡は竹田川上流の東岸段丘上に位置し、現在庄屋屋敷の石垣が残っている。余瀬家は中世から近世にかけての文書が大量に残っている。

調査は近世の余瀬家跡と中世に六郷満山の大力坊があったと推定されるのでその確認を行なった。

遺構 遺構は近世余瀬家の屋敷跡を中心にそれに取り付く嘉永5年銘の井戸、井戸から屋敷の外側を巡る石組暗渠、石垣崩、屋敷荒神や中世(14C)の土坑が検出された。

遺物 出土遺物は17世紀前半以降の伊万里焼多数と14Cの土師器坏部小片が出土した。(村上)



余瀬家庄屋敷跡位置図
(地形図「鶴川」使用)



検出された遺構

49. 坂口遺跡

所在地	西国東郡香々地町大字香々地字坂口	調査面積	6,000㎡
調査原因	県営圃場整備	担当者	後藤一重
調査期間	930901～930931	処置	調査後破壊
調査主体	香々地町教育委員会	台帳番号	新発見

概要 香々地町は宇佐神宮弥勒寺領荘園である香々地荘の故地である。荘域は堅来川、羽根川、竹田川、見目川沿いに形成された谷平野とその間に広がる丘陵部からなる。坂口遺跡は荘域最大の平野となる竹田川下流域の海岸平野に位置する。ここでは、竹田川右岸の微高地上に遺跡が集中しており、坂口遺跡もその一連の遺跡のひとつである。

遺構 調査の結果、縄文時代晩期前半の方形竪穴2基及び包含層、弥生時代前期後半から中期初頭の竪穴、貯蔵穴、土壇及び旧河道、弥生時代後期終末前後の方形竪穴住居3基、円形竪穴住居1基及び壺棺1基、9世紀前後の掘立柱建物、12、13世紀と思われる掘立柱建物などが確認された。

遺物 縄文時代晩期前半の遺物は土器を中心に大量に出土しており、同時期における東九州海岸部での好資料となるであろう。弥生時代前期後半から中期初頭にかけてもやはり多くの土器が出土しており、注目される場所である。

まとめ 縄文時代晩期から中世までの遺跡が確認されたが、周辺の遺跡や微地形などと併せてみるにより、竹田川下流域という単位地域における水田開発を中心とした歴史展開を考えるのに重要な遺跡となるであろう。

(後藤)



坂口遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)



完備状況

50. 田中遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字田中
 調査原因 県営圃場整備
 調査期間 930604～930614
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 100㎡
 担当者 後藤一重
 処置 一部本調査
 台帳番号 112006 (過ノ本遺跡として周知)

概要 平成5年度県営圃場整備事業香々地地区は、竹田川と県道小河内・香々地線の間が事業対象地となった。

田中遺跡は、周辺に土上、御霊遺跡があり、北、東側には条里遺構が広がるなど、その立地環境から遺跡の存在が当初より予想されていた。試掘調査の結果、中世後半の遺物を伴ない柱穴などが確認された。遺跡のすぐ北側には、数haの水田に水を供給する通称「シミズ」と呼ばれる強い湧水があり、遺跡との関係が注目される。(後藤)



田中遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2 大分県教育委員会、1994

51. 塔ノ本遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字塔ノ本
 調査原因 県営圃場整備
 調査期間 930604～930614
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 100㎡
 担当者 後藤一重
 処置 現状保存
 台帳番号 112006 (過ノ本遺跡として周知)

概要 平成5年度県営圃場整備事業香々地地区は、竹田川と県道小河内・香々地線の間が事業対象地となった。

遺跡の東側には、弥生～古墳時代前半の集落が確認された荒牧遺跡があるため、当初は同時代の遺構が確認されるものと思われていたが、柱穴がわずかに検出されたのみであった。柱穴は、出土遺物がなく时期的な決め手を欠くが、中世と予想される。しかし、隣接する田中遺跡に比べると遺構の密度はかなり低い。(後藤)



塔ノ本遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2 大分県教育委員会、1994

52. 信重遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字信重
調査原因 県営圃場整備
調査期間 930604～930614
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 150㎡
担当者 後藤一重
処置 平成6年度本調査
台帳番号 112010

概要 平成5年度県営圃場整備事業香々地地区の実施に伴い試掘調査を行った。

信重遺跡は海岸平野の最上流部に位置しており、平成4年度には渠道の東側で本調査が実施され縄文、古代、中世の遺構・遺物が検出されている。

本年度工事対象地区は、平成4年度本調査区の渠道をはさんで西隣にあたり、試掘調査の結果柱穴が確認された。时期的には、わずかに出土した遺物から中世に位置づけられるものと思われる。
 (後藤)



信重遺跡位置図
 (地形図「鶴川」使用)

文献：「大分県内遺跡発掘調査概報」2 大分県教育委員会、1994

53. 門田遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字門田
調査原因 県営圃場整備
調査期間 930604～930614
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 100㎡
担当者 後藤一重
処置 現状保存
台帳番号 新発見

概要 平成5年度県営圃場整備事業香々地地区の実施に伴い試掘調査を行った。

遺跡は竹田川下流域の一連の微高上に位置するもので、塔ノ本遺跡の上流側にあたる。調査の結果、遺構は稀薄でわずかに溝が1本検出されたのみである。溝からの出土遺物がなく時期は不明であるが、埋土の状況から弥生・古墳時代のもものと想定される。

遺跡の取扱いについて、県西高地方振興局耕地課などと協議を行った結果、盛土工法により遺跡の保存措置をはかることにした。

(後藤)



門田遺跡位置図
 (地形図「鶴川」使用)

文献：「大分県内遺跡発掘調査概報」2 大分県教育委員会、1994

54. 小路遺跡^{しょうじ}

所在地 西国東郡香々地町大字見目字小路
調査原因 県営圃場整備
調査期間 931214～931217
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 250㎡
担当者 後藤一重
処置 平成6年度本調査
台帳番号 新発見

概要 平成5年度県営圃場整備事業香々地地区近
 広工区の実施に伴い試掘調査を行った。

遺跡は、香々地町最大の平野を形成する竹
 田川の流域ではなく、山塊を隔てて東隣に位
 置する見目川流域に所在する。見目川流域は
 竹田川流域に比べると平野面積は小さい。

試掘調査の結果、中世の遺物とともに柱穴
 が確認された。

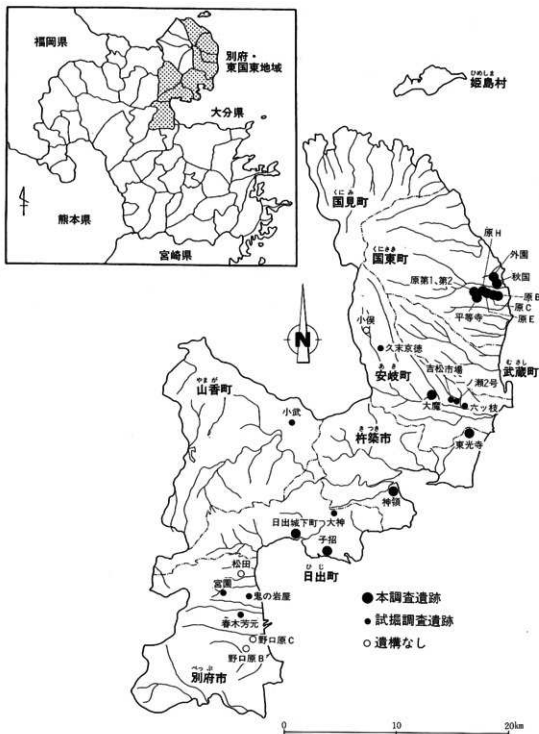
遺跡の取扱いについて、農政部局などと協
 議を行った結果、保存措置が困難な部分につ
 き本調査を実施することとした。（後藤）



小路遺跡位置図
 (地形図「鶴川」使用)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2 大分県教育委員会、1994

別府・東国東地域



55. ^{とうこうじきょうづかぐん} 東光寺経塚群

所在地 杵築市大字横城
 調査原因 土砂採取
 調査期間 940211～940330
 調査主体 杵築市教育委員会

調査面積 約95㎡
 担当者 平川信哉
 処置 現状保存
 台帳番号 213072（東光寺遺跡として周知）

位置 市内東部の標高約130mの丘陵に立地し、安岐町との境界に近接している。現東光寺本堂の裏手に位置する。

周囲は、建築資材の真砂土が産出されるところで、遺跡周辺もかなり現地形の改変を受けている。

遺構 平成4年度に確認された平安時代後期及び鎌倉初期の経塚遺構10基のほかに新たな遺構の広がりはない。

遺物 土師皿破片2点

まとめ 平成4年度に確認された経塚遺構は北東へ延びる尾根方面へ広がっていないことが判明した。

(平川)



東光寺経塚群位置図
 (地形図「豊後杵築」使用)

文献：平川信哉・後藤方彦『杵築地区遺跡群発掘調査概報Ⅴ』杵築市教育委員会、1994 P13～15



経塚検出状況

56. 神領貝塚 じんりょうかいづか

所在地 杵築市大字片野
 調査原因 農業基盤整備事業
 調査期間 931104～940314
 調査主体 杵築市教育委員会

調査面積 約5,000㎡
 担当者 平川信哉
 処置 盛土保存・一部調査後破壊
 台帳番号 新発見

位置 市中心部を流れる八坂川河口の右岸側の標高約3mに立地している。

北西500mの距離に周知の東貝塚が存在している。

遺構 縄文時代後期前葉の貝塚遺構で、後世の削平・攪乱を受けているが全体的な遺構の遺存状況は良く包含層の面積約4,500㎡で、貝塚の面積約650㎡であり、貝層の厚さが約30cm確認された。

遺物 縄文土器片（西和田式、中津式、宿毛式）、骨、石器など数千点。

まとめ 遺構のほとんどを盛土工法により現況保存とした。また確認トレンチの貝層の剥ぎ取りを実施した。 (平川)



神領貝塚位置図
 (地形図「豊後杵築」使用)

文献：平川信哉・後藤方彦『杵築地区遺跡群発掘調査概報Ⅴ』杵築市教育委員会、1994 P4～12



貝塚の堆積状況

57. 鬼の岩屋古墳群

所在地 別府市大字北石垣字塚原
 調査原因 遺構確認（資料整備）
 調査期間 940207～940210
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 500㎡
 担当者 村上久和
 処置 埋め戻し
 台帳番号 214017

位置 別府市の春木川と平田川に挟まれた低台地上に位置する。現状では2基の古墳が約100mほど隔ててあるが、別に須恵器が大量に出土した地点があることから数基群集していた可能性もある。現状で1号墳は径20m前後の円墳である。主体部は装飾がある複室構造の横穴式石室で後室奥壁に石屋形を設けている。なお、2号墳は径30mの円墳である。主体部は天井部の高い単室の横穴式石室である。

遺構 今回の調査は1号墳の周溝確認と石室の写真測量実測及び2号墳の装飾模様の確認を行った。1号墳の周溝確認調査は古墳の南側と北側にトレンチを2カ所設定し、調査を行った。その結果、1号墳の南3mの所で周溝を確認した。2号墳では玄室内の左側壁に円文、屍床に蕨手文などが確認された。

遺物 1号墳北トレンチから須恵器カメ胴部小片が出土した。時期は6世紀後半前後のものと思われる。（村上）



鬼の岩屋古墳群位置図
 (地形図「別府」使用)



前室右側壁に連続山形文は、以前から知られていたが、今回の調査により新たに後室との間の袖石にも叡などの装飾文様が発見された。

のぐちばる
58. 野口原C地区

所在地 別府市大字別府字野口原
調査原因 市営住宅建設
調査期間 940325
調査主体 別府市教育委員会

調査面積 約2,200㎡
担当者 永野康洋
処置 計画通り工事
台帳番号 —

概要 境川と板地川に挟まれた地区で、市営住宅の建設（建替）に伴い試掘調査を実施した。

当該地は水道管等が埋設されているため、重機による掘り下げが可能な範囲に3カ所のトレンチを設定した。

その結果、表土とその下に広がる砂礫層ともかなり攪乱されており、遺物、遺構は検出されなかった。（永野）



野口原C地区位置図
(地形図「別府」使用)

のぐちばる
59. 野口原B地区

所在地 別府市大字別府字野口原
調査原因 コミュニティーセンター建設
調査期間 940228～940301
調査主体 別府市教育委員会

調査面積 約3,000㎡
担当者 永野康洋
処置 計画通り工事
台帳番号 —

概要 別府扇状地を流れる境川と板地川に挟まれた標高約60mのこの地域は、過去において試掘や分布調査が行われたことがないが、地形的に遺跡の存在する可能性もあるため、今回公共施設建設に伴い試掘調査を実施した。

調査は、トレンチ6カ所を設定し重機及び人力による掘下げを行った。

その結果、新しい時期の造成による埋土の下層は、河川堆積による砂礫層が広がっており、遺物、遺構は全く検出されなかった。（永野）



野口原B地区位置図
(地形図「別府」使用)

60. ^{みやその}宮園遺跡

所在地 別府市大字鉄輪字宮園
調査原因 鉄塔建設
調査期間 930906
調査主体 別府市教育委員会

調査面積 約320㎡
担当者 永野康洋
処置 計画通り工事
台帳番号 214013

概要 北鉄輪天満宮を中心とした宮園遺跡は、標高約150m程の台地上にあり、以前より中世の土師器が出土していた。また、台地の北端には縄文早期の押型文土器片が採集される野田遺跡が所在するため、宮園遺跡の周辺部に位置する本地域も遺跡の存在が予想された。

調査は2カ所のトレンチを設定し、遺構、遺物の確認を行った。

その結果、中世の土師器片数点が認められたのみで、明確な遺構は検出されなかった。

(永野)



宮園遺跡位置図
 (地形図「別府」使用)

61. ^{はるきよしもと}春木芳元遺跡

所在地 別府市大字北石垣字古寺
調査原因 マンション建設
調査期間 930719～930722
調査主体 別府市教育委員会

調査面積 約2,500㎡
担当者 永野康洋
処置 計画通り工事
台帳番号 214021

概要 別府扇状地を流れる春木川に沿って広がる遺跡である。標高は55m程で付近には4基の古墳(円墳)が確認されており、また昭和30年頃の九州横断道路建設の際の緊急発掘調査では、弥生時代後期の竪穴式住居等が検出されている。その全容は明らかにされていないが、弥生時代から古墳時代にかけての集落地であったと考えられている。

今回はマンション建設予定地に5カ所のトレンチを設定し、遺構遺物の確認を行った。

その結果、一部に弥生式土器の包含層を確認したが、顕著な遺構は検出されなかった。

(永野)



春木芳元遺跡位置図
 (地形図「別府」使用)

62. ^{まつだ}松田地区

所在地 別府市大字内竈字松田
 調査原因 リサーチヒル造成工事
 調査期間 930517～930528
 調査主体 別府市教育委員会

調査面積 約31,000㎡
 担当者 永野康洋
 処置 計画通り工事
 台帳番号 —

概要 別府市扇状地に張り出した舌状台地上にはいくつかの遺跡が存在する。標高50～60mの松田地区も同じような地形であるため遺跡の存在が予想された。

調査は45カ所のトレンチを設定し、遺構遺物の確認を行った。その結果、時期不明の溜樹状遺構と旧水田面を一部確認したのみで、畦畔は検出できなかった。出土物は、中世の玉緑白磁碗小片と近世の伊万里製染付碗小片など少数である。以上の事から、同地区は江戸時代後期に新田開発されたと推定されるが、顕著な遺構は検出できなかった。

(永野)



松田地区位置図
 (地形図「豊岡」、「別府」使用)

column ⑤

第3回日韓シンポジウム — 先史時代の日韓交流と大分 —



本年度の日韓シンポジウムは、韓国と北部九州～瀬戸内地方の水稲農耕文化の伝播と成立をテーマに、大分市の大分県農業会館において平成6年1月30日に開催した。

韓国側講師に沈奉謙先生(釜山・東亜大学教授)、日本側講師に下條信行先生(愛媛大学教授)と田中良之先生(九州大学助教授)コーディネーターに賀川光夫先生(別府大学教授)を迎え、日韓における水稲農耕文化がどのように伝播・受容・成立したかを具体的事例に基づき講演・討議して戴いた。

日本の米作りが様々な問題に直面している今日、約300人の参加者は終始熱心に聴取し、本シンポジウムも成功裡に終わったと言える。

63. 横手遺跡群

所在地 東国東郡国東町大字横手字国広ほか
調査原因 県道拡幅及び河川改修
調査期間 930419～930730
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 約4,000㎡
担当者 綿貫俊一
処置 調査後工事
台帳番号 217029

位置 国東半島の中央部から放射状に広がる尾根と尾根にはさまれた谷部にあり、標高は67m～75m。西から東へ国広遺跡・森本遺跡・隔弓遺跡が分布し、横手遺跡群を構成している。遺跡群は横手川の北側河岸段丘上に立地する。比高差は約3m～6m。

遺物 国広遺跡では、若干の川原田式深鉢の破片と数百点の無文土器が見つかった他、角閃石安山岩を石材とした石器類がある。また、溝内から平安時代と思われる須恵器や土師器が少量見つかった。

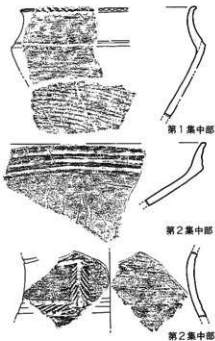
森本遺跡では第1・第2の遺物集中部がある。前者から弥生時代早期の一括遺物、後者からは縄文時代後期三方田式土器の一括遺物が多量に出土している。

隔弓遺跡は前年度からの継続した発掘で、遺物もほぼ同様である。中心となるのは、約1000点に及ぶ縄文時代早期の無文土器である。なお縄文時代早期の遺物の中には押型文土器が1点もない。

まとめ 本遺跡群は国東地方の遺跡としてはその規模、構造、時期幅、出土資料から代表的存在の一つと考えられる。(綿貫)



横手遺跡群位置図
 (地形図「鶴川」使用)
 1. 国広 2. 森本 3. 隔弓



たぶかじょうり
64. 田深条里

所在地 東国東郡国東町大字田深字大田
調査原因 警察官待機宿舎建設
調査期間 931025～931029
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 2,154㎡
担当者 染矢和徳
処置 計画通り建設
台帳番号 217041

概要 試掘調査区は国東市街地の北側0.5kmほどに位置する。標高は5m前後で田深川の形成する沖積平野の末端にあたる。建設予定地は田深条里内にあるため調査を実施した。調査は重機で試掘溝を9カ所設定した。土砂堆積状態は表土層-青灰色土層-赤褐色土層-青灰色弱粘質土層-赤褐色砂層-青灰色土層-礫層-暗褐色砂層-暗灰色弱粘質土層-砂礫層の順である。調査の結果、遺構、遺物は確認されなかった。(染矢)



田深条里位置図
(地形図「鶴川」使用)

65. 平等寺遺跡

所在地 東国東郡国東町大字原
 調査原因 県営園場整備
 調査期間 930510～930726
 調査主体 国東町教育委員会

調査面積 3,900㎡
 担当者 藤本啓二
 処置 調査後破壊
 台帳番号 217053（原遺跡として周知）

位置 国東町の中央部を東流する田深川の下流域
 右岸にある丘陵上にあり標高は約41mである。
 丘陵の北側に広がる平野部には国指定史跡の
 安国寺集落遺跡や条里遺跡が分布している。

遺構 掘立柱建物に伴う柱穴群や井戸（水溜め）
 と考えられる円形の大形土坑

遺物 中世の土師器小皿及び杯

まとめ 井戸（水溜め）と考えられる円形の大形土
 坑と同様の遺構は、田深川下流域の丘陵上に
 立地する同時期中世村落遺
 跡にもみられることから、当
 遺跡は国東地方の中世村落の
 一形態を把握するのに寄与す
 る資料と言える。（藤本）



平等寺遺跡位置図
 (地形図「鶴川」使用)



大形土坑

66. ^{はる}原H地区遺跡

所在地 東国東郡国東町大字原
 調査原因 県営圃場整備
 調査期間 930525～930712
 調査主体 国東町教育委員会

調査面積 1,500㎡
 担当者 藤本啓二
 処置 調査後破壊
 台帳番号 217052 (安国寺遺跡として周知)

位置 田深川の下流域右岸に位置する丘陵下端部の斜面に立地している。同種の製鉄遺跡としては対岸の桜本宮遺跡やその周辺部の丘陵斜面において砂鉄製錬滓及びフィゴ羽口を含む排滓場等が確認されているが、いずれも未調査である。なお、平成6年6月には同一丘陵上の斜面（当遺跡から西へ約600mの地点）において残存状態の良好な整形炉が1基調査されている。



原H地区遺跡位置図
 (地形図「鶴川」使用)

遺構 整形炉（製錬炉）に伴う前底部（作業場）
 排滓場、排水溝ほか

遺物 鉄滓（炉底滓、流動滓、粒状滓、鍛造剥片ほか）総量約30トン。なお鉄滓の総量約30トンの中には板状滓（幅約1m）、炉壁粘土、精錬用フィゴ羽口、排滓場の土も含まれている。
 中国産青磁碗ほか。



炉の前底部の状況

まとめ 遺跡は大分県下において極

めて調査例の少ない精錬段階（鉄塊の生産）から精錬鍛冶段階（棒状もしくは板状を呈すると推定される各種鉄素材の生産）の製鉄遺跡であり、これまで国東町内で調査されている幾つかの製鉄遺跡と合わせて国東半島における中世鉄生産の技術や生産体制の一端を明らかにしてくれる貴重な資料と言える。今回の調査区では、製鉄炉の本体部分は残存していなかったが、炉に伴う前底部や大量の鉄滓が廃棄された排滓場などが調査されている。

（藤本）

あきくに
67. 秋国遺跡

所在地 東国東郡国東町大字北江字秋国
調査原因 県営圃場整備
調査期間 930928～931227
調査主体 国東町教育委員会

調査面積 13,000㎡
担当者 藤本啓二
処置 調査後破壊
台帳番号 新発見

位置 国東町の中央部を東流する田深川の下流域とやや北側を流れる北江川の下流行を隔てる丘陵上の先端部にあり、標高は約20mである。同一丘陵上の西側約1kmの地点には、県指定有形文化財の川原板碑や法隆寺系軒平瓦を出土する桜本宮遺跡などが分布する。遺跡からの眺望は良く伊予灘が一望できる。



秋国遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

遺構 遺構の時期はすべて中世である。
溝 1、掘立柱建物 1、掘立柱建物に伴う柱穴群、井戸（水溜め）と見られる円形状の土坑、土墓 1、焼土土坑（火葬墓状の土坑）5

遺物 遺物の時期はすべて中世である。
瓦器碗、土師器杯、小皿、白磁、備前焼、短刀、土錘、銅銭

まとめ 調査区の中央部付近から検出された幅約2mを測る1条の溝とそれに直行する掘立柱建物（6間×2間）は、中世居館を構成する遺構と考えられる。なお、調査区のほぼ全面に一群のブロックを成して分布する柱穴群は極めて密集度が高いため、掘立柱建物との判別が困難な状況であった。（藤本）



掘立柱建物

68. 外園遺跡

所在地 東国東郡国東町大字北江字外園
 調査原因 県営圃場整備
 調査期間 930712～930930
 調査主体 国東町教育委員会

調査面積 5,000㎡
 担当者 藤本啓二
 処置 調査後破壊
 台帳番号 新発見

位置 国東町の中央部を東流する田深川の下流域とやや北側を流れる北江川の下流域を隔てる先端部にあり、標高は約20mである。同一丘陵上の西側約1kmの地点には、県指定有形文化財の川原板碑や法隆寺系軒平瓦を出土する桜本宮遺跡などが分布する。遺跡からの眺望は良く伊予灘が一望できる。

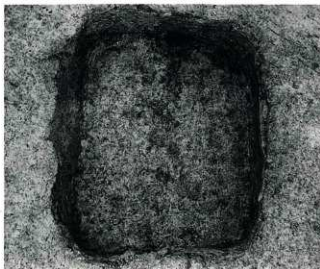


外園遺跡位置図
 (地形図「鶴川」使用)

遺構 遺構の時期はすべて中世である。
 焼土土坑(火葬墓状の土坑)4、井戸(水溜め)と見られる円形状の土坑、掘立柱建物に伴うと見られる柱穴群

遺物 遺物の時期はすべて中世である。
 土師器杯・小皿、土鍬ほか

まとめ 遺跡は同年に調査した秋国遺跡と接しており主体となる時期や遺構の内容も同じことから、本来は同一の遺跡としてとらえることもできる。しかし、地形的には同一丘陵上でもそれぞれ異なった舌状の先端部に立地しているため、便宜的に2遺跡に分けている。



焼土土坑

(藤本)

はるだい
69. 原第1・2遺跡

所在地 東国東郡国東町大字原
調査原因 県営圃場整備
調査期間 940214～940331
調査主体 国東町教育委員会

調査面積 約1,300㎡
担当者 永松みゆき
処置 計画通り工事
台帳番号 217053 (原遺跡として周知)

位置 田深川下流の右岸に位置している。

第1遺跡隣接地には古墳の石材と思われる巨石が散在していたが、これに伴う遺跡・遺物は検出されなかった。

第1は農道部分、第2は排水溝部分にあたる。

遺構 溝

井戸、泥炭層-中世

遺物 土師器…環、高環、壺

須恵器…環、大カメ

木製品…ゲタ他

土師・種子

まとめ 旧地形では、高等線も緩やかで村落の検出が考えられたが、第1区の北側に柱穴、土坑、溝が確認されたが、これらは工法変更で保存された。(永松)



原第1・2遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)



完備状況

70. ^{はる}原B遺跡

所在地 東国東郡国東町大字原
 調査原因 県営圃場整備
 調査期間 930611～930930
 調査主体 国東町教育委員会

調査面積 約3,500㎡
 担当者 金田信子
 処置 調査後埋め戻す
 台帳番号 217052 (安国寺遺跡として周知)

位置 国東町の中央部を東流する田深川の下流域
 右岸にあたる低丘陵裾部の緩斜面上にあり、
 標高は約15mである。国指定史跡である安国
 寺集落遺跡の西側隣接地である。



原B遺跡位置図
 (地形図「鶴川」使用)

遺構 竪穴住居跡 (方形、円形)
 掘立柱建物
 溝ほか

遺物 壺
 高坏
 椀
 須恵器ほか

まとめ 国東町で初
 めての弥生期
 住居が検出さ
 れたことによ
 って、当時の社
 会環境が解明
 されつつある。
 (金田)



住居跡完備状況

71. 原C遺跡

所在地	東国東郡国東町大字原	調査面積	2,000㎡
調査原因	県営圃場整備	担当者	永松みゆき
調査期間	930423～930806	処置	計画通り工事
調査主体	国東町教育委員会	台帳番号	217041 (川原・北江・田深条里として周知)

概要 田深川下流の河岸段丘の北端部にあたり、排水溝により削平された部分である。大部分は包含層で、弥生後期の溝は保存された。(永松)



原C遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

72. 原E遺跡

所在地	東国東郡国東町大字原	調査面積	5,000㎡
調査原因	県営圃場整備	担当者	永松みゆき
調査期間	930806～931005	処置	計画通り工事
調査主体	国東町教育委員会	台帳番号	217053 (原遺跡として周知)

概要 田深川下流右岸の河岸段丘にある。農道部分にあたり、掘立柱建物、不定土坑等が検出した。(永松)



遺物出土状況



原E遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

73. 大恩寺遺跡

所在地 東国東郡国東町大字大恩寺
 調査原因 県道拡幅
 調査期間 931122～931201
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 1,104㎡
 担当者 玉永光洋
 処置 平成6年度本調査
 台帳番号 217015 (範囲拡大)

概要 県道赤根富来浦線改良工事に伴い7m×1050mの範囲にトレンチを29カ所設定し、重機により掘り下げを行った。

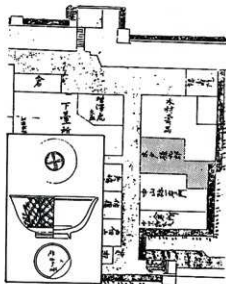
その結果、縄文時代後期の土器、石鏃、弥生時代中期の住居跡1基、中世～近世の陶磁器、掘立柱建物跡などが検出された。そのため、平成6年度に本調査を行うこととした。(玉永)



大恩寺遺跡位置図
 (地形図「鶴川」使用)

column ⑥

県庁前広場モニュメント「平成の塔」建設に伴う府内城三ノ丸遺跡の調査で、「入 孫九郎様」の焼継文字を持つ肥前陶磁器碗が出土した。焼継とは鉛ガラスを溶かした接着剤を使って壊れた茶碗を補修するもので、底部に朱で注文主の名前を書き込むことがあった。「孫九郎」とは幕末に府内藩用人であった「木戸孫九郎」のことで、この茶碗の出土から調査地点が絵図中の木戸家屋敷内であったことが考古学的に証明された。



孫九郎の茶碗

74. ^{だいま}大魔遺跡

所在地 東国東郡安岐町大字掛樋字大魔
 調査原因 県営圃場整備事業
 調査期間 930913～931015
 調査主体 安岐町教育委員会

調査面積 800㎡
 担当者 松本啓子
 処置 計画通り工事
 台帳番号 新発見

位置 国道213号線から安岐町の中心部を流れる安岐川に沿って約5km豊後高田へ向かったところに遺跡は位置する。

遺跡の北側には丘陵が迫り南側には蛇行する安岐川が流れる。

遺構 中世：炭窯3、土塋1、柱穴等

本調査は、調査区A・Bに分かれ、Aからは炭窯3基が検出され、いずれも長楕円形を呈し、床面はほぼ平坦であった。出土遺物は無く、時期を特定出来ないが、その形態、検出状況により中世の炭窯と思われる。調査区

Bからは、柱穴と土塋を検出しているが建物が建つには至らなかった。また、土塋から土師器片、鉢等が出土していることから、12～13世紀代の遺構と思われる。



大魔遺跡位置図
 (地形図「豊後杵築」使用)

遺物 土師器片等

(松本)



発掘状況（調査区A）

75. 一の瀬^{いちせ}1号・2号墳

所在地 東国東郡安岐町大字吉松字市場
 調査原因 県営圃場整備
 調査期間 940124～940131
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 200㎡
 担当者 後藤一重
 処置 本調査
 台帳番号 218013

概要 安岐川の支流である吉松川に前谷川が合流する地点の右岸に位置する。現在、一の瀬1号・2号墳とも破壊が著しく、1号がわずかに墳丘の痕跡をとどめ、2号は石室の石材と思われるものが山積されている。地区の伝承によれば、戦前の道路工事の際、ダイナマイトにより破壊され墳丘の土と石室の石材が持ち出されたようで、その時鉄刀が出土したと伝えられる。調査の結果、両古墳とも幅約2mの周溝が確認され、両者が径約20mの円墳であったことが確認された。(後藤)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2 大分県教育委員会 1994



一の瀬1号・2号墳位置図
 (地形図「豊後杵築」使用)

76. 吉松市場^{よしまついちば}遺跡

所在地 東国東郡安岐町大字吉松字市場
 調査原因 県営圃場整備
 調査期間 940124～940131
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 600㎡
 担当者 後藤一重
 処置 平成6年度本調査
 台帳番号 新発見

概要 安岐川の支流である前谷川右岸に発達した河岸段丘上に位置する。背後の山中には多数の五輪塔があり、中世等の遺跡の存在が予想された。

試掘調査は、工事予定全域にわたり重機により調査区を設定し、作業員により遺構の精査を行った。その結果、中世に位置づけられる柱穴、土壇、溝等が確認された。

農政部局と遺跡の取り扱いについて協議した結果、保存措置が困難な部分について平成6年度に本調査を行うこととした。(後藤)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2 大分県教育委員会 1994



吉松市場遺跡位置図
 (地形図「豊後杵築」使用)

77. ^{むつえだ}六ツ枝遺跡

所在地 東国東郡安岐町大字瀬戸田字六ツ枝
調査原因 住宅団地建設
調査期間 930708
調査主体 安岐町教育委員会

調査面積 700㎡
担当者 松本啓子
処置 慎重工事
台帳番号 新発見

概要 遺跡は安岐町大字瀬戸田740番地に所在する安岐町中央公民館から北東に約100mのところに位置する。

試掘調査は、対象面積約1,200㎡にトレンチを計15本入れた結果、一部で中世の包含層を検出した。しかし、埋め立てをし平屋建の木造住宅であるため慎重工事とした。削る場合、道路工事の場合は調査が必要である。

(松本)



六ツ枝遺跡位置図
 (地形図「豊後杵築」使用)

78. ^{おまた}小俣地区

所在地 東国東郡安岐町大字明治
調査原因 県営園場整備事業
調査期間 930906～930907
調査主体 安岐町教育委員会

調査面積 450㎡
担当者 松本啓子
処置 計画通り工事
台帳番号 —

概要 現地は安岐町の中心部から約13km山間部に入った朝来の谷にあり、町道朝来幹線と町道小俣線の分岐点から北に約200mのところにある。

調査は450㎡にトレンチを計10本入れたが遺構、遺物は確認できなかった。(松本)



小俣地区位置図
 (地形図「鶴川」使用)

ひさすえきょうとく
79. 久末京徳遺跡

所在地 東国東郡安岐町大字朝来字久末
調査原因 小学校用地
調査期間 930525
調査主体 安岐町教育委員会

調査面積 100㎡
担当者 松本啓子
処置 計画通り工事
台帳番号 219002

概要 遺跡は安岐町の中心部から約10km内陸部に入ったところにあり、遺跡のすぐ南には朝来野川が流れる。

試掘調査は、対象面積約500㎡にトレンチを3本入れた結果、遺構、遺物を確認するには至らなかった。(松本)



久末京徳遺跡位置図
(地形図「朝来川」使用)

column ①

豊のあけぼの展 (直入会場)

平成5年11月6日～7日にかけて直入町中央公民館で豊のあけぼの展を開催しました。当日は直入町産業文化祭も行われていたことから、入場者も1280名にのぼりました。

展示内容も旧石器時代～古墳時代にかけて約300点の遺物やパネルをふんだんに展示して、その中に直入町内出土遺物も相当数含めました。また、体験コーナーでは、ドングリクッキーを実際に焼いて試食してみたり、貫頭衣を試着させたりしましたが、小学生を中心に人気の高いコーナーでした。



貫頭衣試着風景



ドングリクッキー試食コーナー

80. ^{こまねき}子招遺跡

所在地 速見郡日出町大字川崎字子招
調査原因 企業誘致造成
調査期間 930525～950713
調査主体 日出町教育委員会

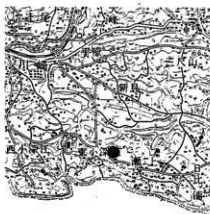
調査面積 2,500㎡
担当者 高松永治
処置 工事により破壊
台帳番号 220058

位置 日出町の南側の海岸段丘上の丘陵に位置する。西側約500mには早水台遺跡(旧石器・縄文)がある。このほか、この海岸段丘一带には旧石器時代、縄文時代の遺跡が数多く立地している。遺跡は丘陵の頂部から南側にかけて位置しているが、開発部分が頂部から北側であったため比較的小規模な石器群であった。

遺構 なし

遺物 石鏃、使用痕剥片、剥片、石核など約30点である。石材はチャート、流紋岩、安山岩など様々であり、ブロックといった形でまとめて出土したものではなく、調査区内で散乱している。出土層位は、固く引き締まったローム層(ハードローム?)からである。

まとめ 調査対象地域のほとんどがミカン畑であり、畑地造成で既に1mほど削平されたり、天地返しをされているため攪乱層から縄文時代の遺物が検出される程度である。また、削平を受けていない場所では後期旧石器時代後半期の石器類が出土している。この石器類の特徴などからナイフ形石器文化期後半～終末にかけてのものと考えられる。(高松)



子招遺跡位置図
(地形図「豊後杵築」使用)



石核出土状況

81. 日出城下町遺跡

所在地 速見郡日出町2974の1
 調査原因 庁舎増築改築
 調査期間 930816～930927
 調査主体 日出町教育委員会

調査面積 約500㎡
 担当者 高松永治
 処置 工事により破壊
 台帳番号 220024

概要 この遺跡は、日出城（賜谷城）の城下町の一部である。日出の市街地のほぼ中央に位置する庁舎の東側に増築するため調査を実施した。増築場所には、町民集会所、駐車場があり、これを取り壊した後に遺構の確認を行った。

遺構 調査区は建物跡のコンクリート基礎部などがあり、取り壊した建物以外の建築材などで攪乱されている。駐車場跡から屋敷跡と思われる石積みや土間（漆喰）、排水路などが検出されている。

遺物 出土遺物は、ほとんどが陶磁器であり、約2000点出土している。

まとめ 町の中心部となっているため、かなり攪乱が激しい状況である。江戸時代後期には、この場所が南国（南郡）屋という商家であり、関連した遺物として陶磁器の補修の際に朱で記入されたと考えられる文字「南郡」が確認できる。（高松）



日出城下町遺跡位置図
 (地形図「豊後村案」使用)



遺構検出状況

82. ^{おたけ}小武遺跡

所在地 速見郡山香町大字小武字今畑
調査原因 圃場整備
調査期間 930826～930830
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 6.5ha
担当者 高橋信武
処置 計画通り工事
台帳番号 新発見

概要 国東半島中央部から放射状に伸びた細長い谷の中の水田地帯にある小武地区の事業は、昨年度に引き続き実施されるもので、今年度は谷の入り口側が予定地である。

16カ所でトレンチ調査を行った結果、少量の遺物は出土したが遺構は検出できなかった。遺物は弥生中期の土器・14～15Cの中国製白磁・16Cの中国製青磁・近世の陶磁器類と土師質の鉢である。

弥生土器は1点だけの小片で近世も含め遺構が検出できなかったので、工事の実施にあたり問題ないと判断した。(高橋)



小武遺跡位置図
(地形図「豊後杵築」使用)

83. ^{のはる}野原A地区

所在地 速見郡山香町大字野原
調査原因 県道改良
調査期間 940307
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 542㎡
担当者 玉永光洋
処置 予定通り工事
台帳番号 —

概要 県道山香院内線改良工事に伴って、試掘調査を行ったが、遺構・遺物とも確認できなかった。(玉永)



野原A地区位置図
(地形図「豊後杵築」使用)